

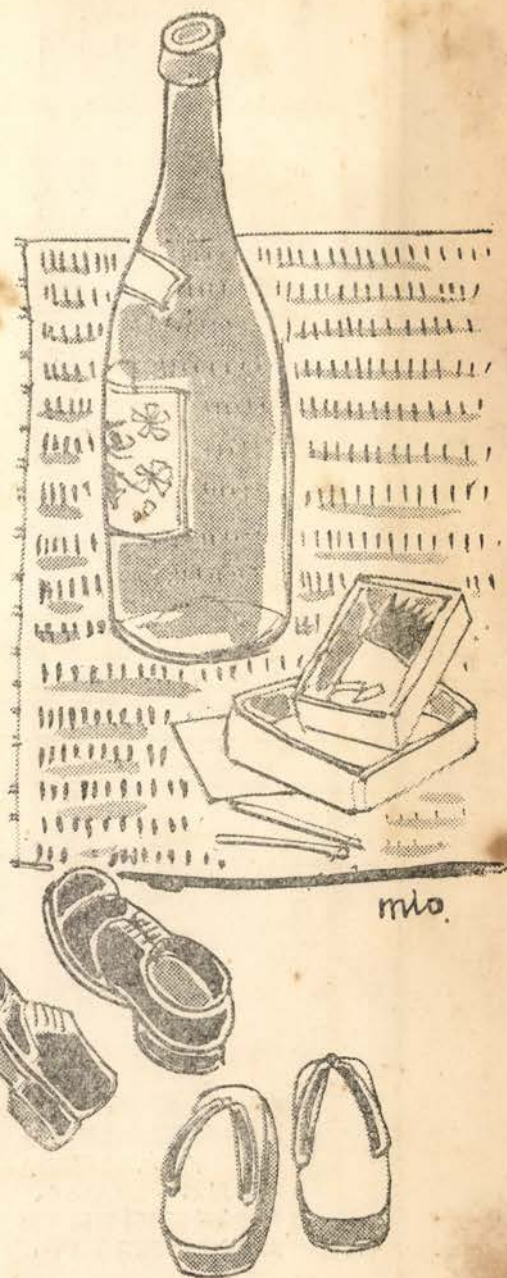
川
柳
の
雅
証

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-linon

The Senryu Zasshi

No.323



四月號

本社四月句會は

四月三日(第一土曜)午後六時下寺町二丁目市バス停前 光明寺に於て
兼題「首相」「自動車」「保母」・柳話・句評其他——來會歡迎

四月號目次

(昭和二十九年)

題字……麻生 路郎
表紙……米田三男之介

「旅人」出版記念会……北川春集記……(四)
その夜の感想……諸 家……(六)
春の部屋……麻生 路郎……(三)
川柳いける……路郎、鮎美、生々庵
口の人々……貴山、春集……(四)
炬燵から命令……藤本 満年……(三)
香蘭の將軍……東野 大八……(八)
句集「旅人」と不惑……北川 春集……(四)
窓口談義……麻生 路郎……(三)
平 宗 盛……富士野鞍馬……(天)
省 略 語……戸田 古方……(七)
柳縁弄花さんと僕……酒井ひか平……(六)

BK川柳の会廿九年度課題及選者……(七)

★

不朽洞句帖……麻生 路郎……(三)
近作柳櫛……麻生路郎選……(三)
川 柳 塔……麻生路郎選……(八)
同舟近詠……諸 家……(二)
一路集「女教師」……戸田 古方選……(二)
「約束」……杉谷 湖山選……(三)
各地柳壇……(三)
★
不朽洞会から……(五)
柳界展望……(四)
公私雜記……(三)

胃潰瘍

胃痛・胃酸過多
十二指腸潰瘍
予防・治療

ファイナリン

潰瘍を促進させる胃液酸度を低下させ、同種剤中副作用がいちばん少く、価格も低廉な新原因療法剤です。予防にもよい。

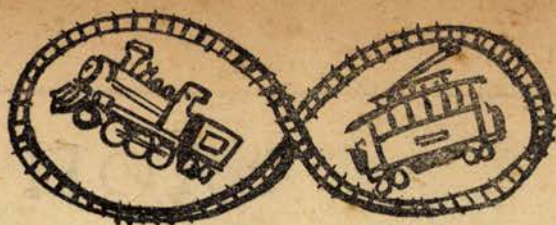


OSK

毛織物
既製服
製造卸商

株式会社
大坂商店

大阪市東区糸屋町一丁目二
電話東④一七四五番



春の部屋

代議士と金

代議士になるにはウ
ンと金が必要そうであ
る。代議士になつてか
らでも、大いに金が必要
そうである。それでも
代議士になりたがる者
が絶えない。やはりど
ツかの顧問になれるが
らであらう。真逆小菅
で特別の差入れをして
もらえると云う優越感
に浸りたいためではな
いらしい。

原爆魚

ビキニで水爆の実験
もいいが、私たちはマ
グロと同じ扱いはうけ
たくない。
何れは死なねばなら
ぬマグロだつたにして
も、実験のギセイにな

つたのである。冥福を
祈つてやりたい。

汚職

近ごろは汚職ばかり
である。汚職と云う熟
語は誰の発案か知らぬ
が、見るからにイヤな
感じがする。潰職の潰
の字が使えなくなつて
から新聞社あたりで考
え出したのであらう。
私はこの文字を見る
と、シニョウの汲取業
のような気がしてなら
ぬ。何れにしてもくさ
いことに関係があるよ
うだ。

顧問の下落

むかしは顧問と云う
とエライ人のように思
つていたが、近ごろの
顧問と云うのはアルバ

イトのことらしい。そ
してオフィスは大てい
待合である。

学生の自殺

近ごろは高校の学生
がチヨイ／＼心中した
り自殺したりする。心
中も自殺も自由だと云
うのであらう。

一ペンや二へん試験
に落ちたからと云つて
自殺したいと思う学生
は、何べん落第されて
も、自殺の出来ない親
のいることを考えて見
るがよい。

糞なばんざい

有田代議士が大阪駅
へ戻つて来たら、百人
余りの出迎人がばんざ
いを唱えたそうである
が、私にはその意味が
わからない。そんな人
たちの名前を書きとめ
ている人がいたら後学

のために聞かせて欲し
い。十萬円の謝礼は出
来ないけど。

川柳人は斯く

生きる

疑獄や汚職の顔ぶれ
を見ても川柳人は誰一
人いない。と云うて、
心中や自殺の記事を見
ても川柳人の名は見当
ある。(路)

不朽洞句帖

麻生路郎

ボーヴォワール自身も女なるを知り
おばあさん十吾に似てていやがられ
ひそ／＼と隅で話せば汚職めき
文楽人形みな寒むそうに寒むそうに
あの人もやはりそうかどスキヤンダル
白 遂に灰色になり黒になり
奥様と云われピアノはもう忘れ

川柳

々人の口るけい

達人の口るけい・でのるすき浮き浮も氣とく咲が桜
(局集編) たつらもてし供提を物説い輕に

司会

麻生路郎
水谷鮎美
中島生々庵
友淵貴山
北川春巢



春巢「今夜お集りの方々には酒の方
も、豪の者ばかりと思ひますの
で、先ず酒は一体どの位飲めるも
のか、
酒量と云うことからお話し願ひ
ます。
鮎美「では私から、私自身のこと
を申し上げます。まだ黒髪がふさふ

さとおつた頃には、一番鶏を聞き
ながら、二人で二升飲んだのが最
高でした。以来三十余年酒量はぐ
つと減りまして、二年位前からは
お銚子二本位ですかな。おつとめ
であれば四本位飲めるでしょう。
一氣に飲むのは余り好みません。
許されるなら、朝、風、夜と一本

ずつ飲みたいのが願ひです。(誰
か声あり、庄助さんやな。)
路郎「酒量と云うても、これは人
にもよるし環境にもよるしするの
で、一概には云えません。まア鮎
美君の云う二人で二升と云う方
は酒豪の部には入らないで、酒飲
みの入口(笑)と云う位なもので
すな。徳川時代には、大食競べ、
大飲競べと云うようなものが流行
つて、随分飲み食いしたらしい。
此の間新聞を見ていたら、冷や酒
一升を二十分間に飲んで死んだ青
年があつた。これなどは酒を飲ん
だとは云えないでしょう。私も子
供の時分から酒を飲んで、自分の
記憶では七つの時に冷やで二合飲
んで、酔うたことを覚えてゐる。
学生時代には学校の相撲の代表
選手をやつていたので、学校が力
士を二人雇つて稽古をさしてくれ
た。稽古がすむと力士と共に一杯
やりに行つたものだ、その頃は
随分飲めたものだ。学校を出た頃
に最高三升飲んだことを覚えてい
る。尤も一氣に飲むわけがなく、

へたつてぼつ／＼飲んだわけだ。
酒と云うものは、飲めばかなり飲
めるもので、腹が空いていて氣持
の朗らかな時には、少量でいゝ氣
持になれるが、不愉快なことがあ
ると相当飲んでも酔わない、と云
う不思議な力を持つた水だな。
生々庵「私も非常に酒が好きの方
で、子供の時分から親しんで育つ
て来たのでありますが、私の古い
句に

晩酌を祖父代々の家風とし

と云うのがあります。若い頃随分
飲んでも余り酔わなかつた時代が
ありましたが、丁度大学を出た年
の夏、どの位飲めるだろうかと、
云うことを友達と話し合つてい
る中に、一度レコードを取つておこ
う、と云うことになり、時間を三時
間に制限し、勿論素ツ裸で扇風機
に当りながら私のビールのレコー
ドは二十九本でした。それも時間
が来たら止めたのでありまし
て、病院に帰つて、はたから見
たらどうであつたか知りませんが、
とも角その晩宿直をしたことを覚
えています。

路郎「中々豪の者ですな。
生々庵「二十七才の時です。

路郎「新聞記者時代には三百人位
の宴会で、盃のとりやりをして廻
つた。所が宴会の献酬と云うもの
は、一向酒飲みとしては嬉しくな
い、矢張り仕事と云う觀念がの
かない。三百人献酬して廻ると随分
飲むが酔わない。それでその席を

迂り出て別の料理屋へ行き、宴会
に来ていた仲間へ電話をして呼び
出して更に大いに飲む、と云う位
大いに飲んだものだ。その後、献
酬を廃止してしまつた。その時分
でしたか、芸者と飲み合をして、
コップを下へ置かずグツと飲ん
で、飲んだらすぐ差す、グツと飲
んだらすぐ貰うと云う具合に続け
様に二十六杯飲んだ。御承知のよ
うに、コップ一杯は一合だから二
升六合飲んだことになる。芸者が
二十六杯目をよう飲まなかつたの
で止めた例もある。そんなことか
ら、後の話だが、全然献酬を止め
てしまつた。その理由は灘の酒屋
が出した新聞に書いたことがある
が、献酬と云うことは、同じ量を
同じ速力で飲むのだから、本人が
酒を飲んでゐるのではなくて、酒
屋のために酒を飲んでゐるのだ。
酒は飲む人によつて量が違ふし速
度も違ふ。酒は盃で飲むのがよい
人もあり、コップで飲むのがよい
人もある。自分で楽しんで飲むの
が一番よいのだと思う。腰掛けな
んかで一杯やつてゐると、隣の席
でいゝ氣持になつた人が「勿論知
らぬ人だが盃をくれたので、断
つたらおこられた。飲み屋のおや
じが、献酬はしない人だと説明し
てくれたがそれでもおこつてい
る。然し自分も頑固に断り続けた
こともある。酒の話をすると今で
ももういゝ心持になつてゐる。し
かし、現在ではもう昔のように大

酒はやらない。此のことを云うておかぬと、路郎は酒が好きだ、飲ましてやろう、と好意を持つた人があつても、一氣に引受けられぬからである。今でも日に二、三回飲むこともあれば、一回も飲まないこともある。一回に四、五合飲むこともあれば、二本位のこともある。これは自分の好きな量であるとは限らぬ。その時の機合にもよるのである。(笑)私は所謂晩酌と云うのはやらない。

貴山 先程からのお話で、煙に巻かれたと云うより酒に巻かれまして。早くこゝから逃げ出したい気がします。(一席を替えてよそで飲みたいのやろ)の声あり。(一先程から、子供の時分から飲んだ、と云う話が出ましたが、私は母の里が造り酒屋をしていましたので、母の話では乳房の先へ酒をつけて飲まずと乳をのんでくれた、そうです。その点では皆さんよりも先輩だと思います。

鮎美 先程先生の献酬はやめると云われた献酬は、衛生的にも清潔でいいことですね。

路郎 中には俺の盃は汚いのかと云うて、今の衛生的と云う問題から詰つて来る人もあるが、僕にはそんな意味はない。その人の食べさしでも食う度胸がある位だ。要は味わつて酒を飲みたいと云う気分だ。よく宴席などで、向うからくれた盃を二つ並べていると、芸者が来て眼鏡をお外しなさいと云

うので、酒を飲む気分がこわされる。貰つたのを直に返さねばならぬ気分です。酒を飲みたいくない。それで大抵お酌に芸者が来て、君は酒を飲むのか、好きか、と云うことを訊いて、飲みたければ君の盃を持つて来い、お酌をしてやれ。私の盃があいたらついでにやれ、と云う。相手を無視してやるわけではない。友人と飲んでも向うがあいたらお酌をしてやる。ゆつたり気の向く儘に飲む、と云うのに他ならない。従つてお客をしていふと云うような席は余り好きではない。

鮎美 つまり皆さんが、先生のようなお気持になられたら宴会も氣持がよいですね。此の頃私は芸者と酒を飲む機会がないので、昔のような気分は出ませんな。

貴山 駅でもそうです。昔は駅で酒を飲んだ人を見ると、こつちも飲みたいと思いましたが、此の頃はそう云う氣持はなくなつた。

路郎 戦争で酒がなくなつてから一線を引いて、各人の酒量が昔と違つて来た。若い人は昔のよい酒を知らず、自分の酒量を知らず、悪い酒をガブ／＼飲んでよく八百屋を出している。その点昔の人は八百屋を出さない。酒が高くなつたので少量しか飲めないのと、悪くなつたのが原因かも知れない。

貴山 駅で酔払いが寝ていると、昔は腹が立つたが、此の頃は同情的になつて来た。どこ迄帰るのか聞いてやつて、終電車に乗るようにして上げている。

鮎美 その点私の沿線の出屋敷はドブの本場で、上りのプラットにも下りのプラットにも、ベンチに腰も掛けずコンクリートの上に戦死の恰好で八百屋を出している。出屋敷では一級酒なんか置いてても売れないので、皆二級酒です。ドブは一合十円ですからね。二級酒一合の五十円で五合飲める。ニコヨンに余り倒れていないで、サラーマンの、それも余り見窄らしくない人が倒れている。酒飲んで倒れているのは大ていラサリマンです。ドブで倒れているのです。

生々庵 委しいものですね。

鮎美 私はドブは飲みますが、一回に二合より飲みません。然し本当のドブは酔心地がよいですよ。

生々庵 私はドブの経験はないが、最近よいドブを飲ます所がある、と誘われている。

路郎 茶びんで五合なら五合、一升なら一升持つて来る。戦後私は誘われて行つたことがあるが、顔触れを見ると、新聞社の連中やら、会社でも何々会社社長と云うような名刺を貰つて驚いた。

鮎美 はじめは、値段が安いと云うので悪いのだと思われようだが……。

貴山 肴は臍物ですか。

鮎美 それもあるが、何も取らんでもよいですよ。梅田なら普通の

酒屋が置いている。ビール壺一本五十円で、出屋敷の方が少し安い。物も出屋敷の方がよい。

春巢 それでは次に

酒癖 と云うようなことに就いてお話し下さい。

生々庵 酒癖と云うと、飲んであと暴れたりする悪い方面を連想しますが、いふ傾向だつてありません。飲んだら梯子の人もあり、私はよい酒癖の方で絶対に梯子の出来ぬ方です。ずつと飲んでいとおつき合ひが出来るが、席を替えるとき、苦しくて仕方がない。生れつきた。よい酒癖で、酔払うと家内や女中をつかまえて丸帯を買つてやる。今迄に何本丸帯を買つたか分らぬ位だ。(笑)

路郎 私の句に

ラウンドガール父の酒癖思はされ

と云うのがある。私は酒は至つて好きだが、酒癖の悪い人の行動を見ると実に苦々しく感じる。昔南海で新聞電車と云われて午前二時に出る電車があつて、酔払いが沢山乗つていて、あの柿の腐つたような臭い息を吹掛けられると、実に嫌な気がした。暴れて喧嘩したり、甚しいのになると何でもないことから相手を昇天させてしまふ。損な酒である。

私の句に

君の酒はいいと云われて松の内

と云うのがあるが、私は飲むと非

常に愉快になる。飲まぬとむづかしい顔をしているので、女の人などは寄り付けないと聞かされる位だ。飲むと普通の人の調子になる。家庭でもお父さんの酒はよいと保証されている。では酒癖はないかと云われると、矢張り生々庵氏の云われた酒癖がある。戦前には飲むと本屋へ行き、本を一抱え買つて来る、時には呉服屋へ行き、一抱えと云うわけには行かぬが二三反買ふ。常に呉服屋を覗きもせぬが、飲むとウインドの色や柄に引きつけられて買つて帰ると云う酒癖がある。此の酒癖の延長として、最近は一抱えも買えぬので、書物一二冊、反物も一二反程度です。面白いのは、これを誰が着たらよいかを考えずに買ふことです。持つて帰つて、どいや、と蔑乃に云うとこんな派手なものは駄目、と云う。どいや、と梨里に云うと、梨里は、こんな地味なもの着られまつかいな、と云う。或る市電に勤めている女の子に、母が地下鉄で切符を売つていると聞き、年令を聞いたら丁度よさそうなので、上げまつき、と云うたら、その母親は夫があつて、知らぬ人から反物を貰えぬ、と受け付けてくれなかつた。それではワシが着ると、云うて女の着物を寝巻にして自分で着た。柄や色が面白いから買うので、買つてからやり場のないことがある。

生々庵 それをうすると、先程の私の

丸帯を貰う酒癖は、先生のように実行に移さぬのであくる日困ると云うことはない。

鮎美「私の酒癖も、飲むと非常に勇気が出る。短冊を書く時一杯飲まぬとよく書けない。もう一つは子煩悩になつて来る。ケーキを二箱も三箱も片手に買つたり、やれ林檎だ蜜柑だと果物を反対の手に買つ。平素は余りしないが、自分でもよい酒癖やと思つてゐる。

路郎「一般に何か買いたくなるのは確かだ。」

貴山「僕の酒癖は、口不調法が口軽くなつて失敗することだ。もう一つは正義感(?)が、出て、女をからかつたりしている人があると腹が立つて来る。

鮎美「喧嘩を貰う方ですか。」

貴山「此の間も難波の駅で、女をからかつてゐるのを見て助役が止めに行つたら、助役の眼をついた。唐手の心得があつたらしい。そこで私が行つて、私は非番だつたので私服を着ていた。抑え付けてやつたらキンタマを握りに来た。そこで今度は逆にこちらがキンタマを握つてやつた。そこへ巡査が来て、その男は遂にあやまつた。私の酒癖は正義感ですな。酒の悪い所は知つてゐるから、自重して喧嘩すると云うことはない。」

路郎「私も飲んで喧嘩をすることはない。来れば受けるけどね。生々庵「川柳人には概して人が嫌

う酒癖がないですね。平素から何か修養する所があるんだね。

貴山「川柳家ではないが二十才代の人に酒癖の悪いのがありますね。

生々庵「どのグループにも、一人や二人は居るものだが川柳人のついででは、宴会の機会は比較的多いの、案外起こらないね。

貴山「そんな句がありませんね。悪酒と知り一人逃げ二人逃げ

(井蛙)

鮎美「川柳のグループでは、第一勤めが違うから、もや／＼がない。日頃のウツパンを酒の上で、と云うのがない。それが氣持よく飲める一因でしょう。

路郎「緑雨君の句に、

酒ついてあなたは一体どなたです

と云うのがある。腰掛けの句やな。知らぬ人に飲ましたがるのも一つの酒癖だね。亡くなつたかほる君はよく酒を飲んだ。飲むと一寸人間が變つた。交番所へ入つて文句を云つたりした。財布を調べられてお金は皆上げまつさ、これだけはお金が残ると云いまつさかい残しとくなれや、と巡査に春画を見せていた。里十九君が同じ島の内なので宅へ送つて行つて、ピシヤンと戸を閉めて帰つて来る

と、又出て来る。ポストのかけへ隠れて見ていると、誰も人がいないので、家へ這入つてしまふと云つていた。

鮎美「かほる君と尼崎で飲んで、

梅田へ送つて来て円タクへ押し込め、ドアをピシヤンと閉めてさよならと別れたら、自動車のあつちのドアから出て今晩は、とやつて来たようなこともあつた。

路郎「かほる君は若旦那のくせに、酒くせはよい方になかつた。尤もけんかはしなかつた。酒の句はうまく詠んでいる。

酒の名にしては忠勇野暮なこ

(かほる)

忠勇は四角四面に酔はせそう

(同)

などは誰にでも詠める句ではない。

野介君の句に、

梯子酒わが淋しさの限りなし

と云うのがあるが、私が梯子をやつたのも毎日新聞にいた頃ですな。最高九軒廻つた。

春巢「酒癖はこれ位にして、次に酒飲みのお奥さんの意見に就てお話し下さい。

生々庵「柳秀氏の句に、

飲み過ぎへ妻は子供の年にふれ

と云うのがあります。柳秀さんには子供があつたのですか。

路郎「大きな子供が三人もあつた。奥さんの里は九州の造り酒屋だつた。

生々庵「私は酒に酔うて家内に意見された経験はありません。私の句にはむしろ

子の寝息聞き／＼妻と酌む夜長

と云うのがあります。これは意見とは反対です。意見と云えば叱られてゐるようですが、必ずしもそうではないと思ひます。

武士道へ妻も墨悟の盃を受け

(不二)

これもよい句です。酒癖の所で話が出たように、柳人には奥さんに見解を受けるような人はないと思ひます。

飲んでほしやめてもほしい酒まつき

(腹乃)

路郎「僕も此の句が証明するよう

に、家内に酒の意見をされたことはないね。

生々庵「鮎美さんも奥さんに叱られたことはないでしょうな。

貴山「僕はあるんです。宴会へでも素面ではよう行かんの、家から飲んで行きますね、そしたらうちから飲んで行くことはいらんと叱られますね。

生々庵「割勘なら飲んで行かん

と、向うで飲みなはれ、とな。

鮎美「そんなら家で飲まんと途中で飲んで行つたらよろしいがな。

生々庵「鮎美さんはそれをやつて

大阪名菓

もろかみかみ

源氏と最や

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九

民かまど本舗
電話 三四〇九

な。おこり上戸や泣き上戸でない私ですから、妻は意見めきませんし、迷惑や世話も焼かせませんから、帰りましても至極円満です。

酔い心地をよく心得ていて、よい相談相手になつてくれます。

(「諦めてるのやろ」の声あり。)

いやこれはほんまだつせ。

路郎「よその奥さんは知らんが、うちは家内が酒好きの方やから、体をこわしさせねば、おやぢに意見することはないし、又、しても聞くとおもうとらんしな。

生々庵「むしろ、今夜は酒やめ

る、と云う方が心配しますな。

(同感の声ばかり。折角用意してあるの、仕方なしに飲んどくと云うようなこともある。

路郎「大体細君はおやぢの酒飲むことに理解を持つてゐる。人によれば諦めてゐる。又飲むために喜んでゐる。何か云い難い云うよう

なことを云う機会が出来るので喜んでゐる。その点から軽く飲む夫

は細君にとつては幸福だ。

生々庵Ⅱその点で川柳人は妻への思い遣りがあるね。

春巢Ⅱでは次に

飲み友達に就いてお話し下さいませんか。

青山Ⅱ私の飲み友達は何です。子供は親と一緒に飲むのをこわがるし、嫌がるものですが、私の伴は某会社員で、営業の方面です。客があるし、私より酒は強い。私は家で二人で飲むのが一番楽しみです。

生々庵Ⅱその点では先生は奥さんが飲み友達ですね。僕らも子供と飲むのが愉快だ。

鮎羹Ⅱ僕は子供がまだその年令でないで、その気持は分らない。昭和二、三年頃は水車、夕鐘、豆

秋君らとよく飲んだ。よくと云うより氣分に陶酔した。道頓堀で公衆、正弁丹吾などを廻つた。その後夕鐘君は故郷へ永住するし、水車君は名古屋へ転居し、現在では豆秋君一人となつた。時々電話で打合せて、新世界のマスヤ、アミヤ、大万あたりで飲むのを楽しみにしている。

生々庵Ⅱ飲み仲間、私の句に飲み仲間宗衛門町に齒が立たず

と云うのがある。あの酒を楽しんでいられた柳秀さんの句に、中折へ散る花もよし飲み仲間

と云う句がある。これは以前から私の頭にこびりついていて、四畳半ばかりで飲んでいられたと思つていた柳秀さんが、こうした句を作られたのを見て感心しました。強硬に出るとなみ／＼酌いてくれ

（柳秀）
こう云う機会は、酒飲みの我々には時々ぶつかるのであります。「中折へ」の句は、句としても佳句で、又柳秀さんにこんな心境もあるのかと感心させられました。路郎Ⅱ飲み仲間は嬉しいものだ。昔は私は川上日車君とよく飲んだが、彼は上機嫌になると、「お江戸日本橋」をよく唄つた。

鮎羹Ⅱ三笑君は酔つて句会へ出て、句は作らずに居睡りしてしましたな。

路郎Ⅱ大八君が三月号に安宿の三河屋のことを書いているが、三笑君は戦前に、その三河屋の前でめし屋をしていた。

生々庵Ⅱ（改つて）先生なんか、五十年も川柳生活をして居られると、飲み仲間も沢山いられたでしょうが、結局飲み仲間が長生きしたか、飲まぬ方が長生きか、どちらでしょう。

路郎Ⅱ飲み仲間が長生きしますな。長生きとは心配せぬことだ。日向ぼこをして嬉しい氣持になつてると長生きをする、とアメリカカの「Health」健康」と云う雑誌に

書いてあつたが、飲むと嬉しい状態になり易い。飲む人が飲まなくなると、奥さんは警戒を要する。酒を飲んだら早う死んだと云う理由はない。暴飲暴食は問題外だが、人間は体内にないものを吸収するようになつてゐる。私らは酒を飲んで養分を取る。仕事の上でも、グツと圧縮して頭を使わなきゃならぬ人は、酒が必要だ。酒をよく飲むのは、労働が激しい時だ。仕事をせぬ時は飲まずに居れるが、原稿を三日間もブツ通して書くと、飲まずにおれぬ。生々庵氏がよく飲むのも仕事がいかに

だと思ふ。あの沢山な病人を診察して、待つたなしに頭を一時に使わねばならない。その後では酒を飲まねば疲れはおさまらないのだ。

この時生々庵の奥さんが、お酒を運ばれながら、お酒を飲まれぬ時は、あれ程好きな人が、体がどうかなつてゐるのではないかと、反つて心配しますよ。（一同感嘆おく能わず、拍手）
生々庵Ⅱ色々とは話は出ましたが、最後に湧三氏の酒煙草やめて余生をどうする氣

「BK川柳の会」廿九年度の課題と選者が決まる

課題と選者が決まる

応募規定

★放送題目 「趣味のしおり」の時間

★放送日時 毎月第二土曜日午前六、三〇、六、四五（第二放送）

★応募句数 三句以内

★用紙 官製はがき

★切 毎月放送日の前月末日着便のこと

★投句先 大阪市東局区内馬場町・大阪中央放送局

★発表作品 「BK川柳の会」入選三句 佳作十五句

★賞 入選三名、賞金及び選評プリント、佳作十五名選評プリント

課題並選者

廿九年

四月 「猫」 梶元 紋太
五月 「男の子」 麻生 路郎
六月 「朝飯」 岸本 水府

アサヒビールは
あなたのビールです



朝日麥酒株式会社

七月 「近所」 房川 素生
八月 「ネオン」 清水白柳子
九月 「算盤」 林 一六
十月 「時計」 梶元 紋太
十一月 「社長」 麻生 路郎
十二月 「十二月」 岸本 水府
三十年
一月 「後悔」 三条東洋樹
二月 「寝台」 中島生々庵
三月 「ランドセル」 川村伊知呂



池田市 戸田 古方

倫理再建右へならえといふたげな
灰皿の今日は水気のないまゝで

尼崎市 水谷 鮎美

握手して別れ女も少し酔ひ
早退で待つてゐるのに待ち呆け
街の灯のしぐれて旅の橋を越え

ホノルル市 内藤 草一郎

騙されて笑える程に遊び馴れ
こうなれば意地よと金に振り向かず
妾心を怒る資格の金がない
迂闊にも旦那の有無を聞かんだ
もう隠し切れぬとおんな不貞腐れ

米子市 三鴨 美笑

急用の電話は犬が居らぬとか
紅茶でも飲もうか服は新調だ
お見舞に來たのが掃除して歸り

ホノルル市 白砂 旋風

子を産んで同権など云うぞれず
風情権こつちに呉れど又もスト
共嫁ぎつい妊娠をして仕舞い

布施市 吉田 水車

十二月気をとり直しとり直し

見て居れば化粧の手順おもしろし
酒たんば買うて女房に叱られた
すうどんへ今更耐乏説かれたり

大阪市 須崎 豆秋

代議士にや雪の白さも判るまい

墓標さへ朽ちんとするよ兵隊の
ふるさとの赤土つけて靴帰る
ハゲ隠す帽子だつたらよし給え

大阪市 正本 水客

ひと昔になるなと指を折つてくれ

貧乏のよさを女房も悟つてき
末の子の頬杖父に似ておかし
指角力仲居の方がはれている
風呂婦り明日も生きる星が出て
貧乏に似ず遺言を残しとき

池田市 黒川 紫香

ぜんざいを喰べ／＼腹も立てられず

妾とは猫の座布団まで作り
一電車づつに勤めの子が帰り
腹藝が出来ないまゝに停年さ
風邪薬のんで一算またあわせ
子を負うてあられの街へ出る寒さ

大阪市 丸尾 潮花

振付へ師匠も病氣押してゐる

当るかと聞けばくじ屋は笑うだけ
兄弟子の順にけい子場叱られる
湯の町へ來たわ雲井の居たじぶん

学校を出すまで妻も働く気

妻ふるくわきびおろしの道になり
まだ胸のどこかに残るひとに逢い
腹立てた女同志の黙秘権

博多まで急行券で逢いにゆき

髪梳けば髪匂いが縁に落ち

大阪市 北川 春巢

長男の成績一喜一憂し

詩吟今自己陶醉の眼をつぶり

耳掘りの好きな女房にも困り

すり切れた服も居る／＼通勤車

ラブシーンのポーズで女すねて見る

奈良県 尾崎 方正

着こなしへ小商賣の香が抜けず

流行ッ妓かづらを取ればアブレにて

大阪市 武部 香林

恭敵に出逢い二号は一寸すね

手袋の色もおんなじ老夫婦

大阪市 菊沢 小松園

犬連れて母校の庭を駆けさせる

パ、マ、と云わせ三味線習つてゐる

手に負えぬ子になる様な育てかた

子の寝顔見ながら約手に判を押し

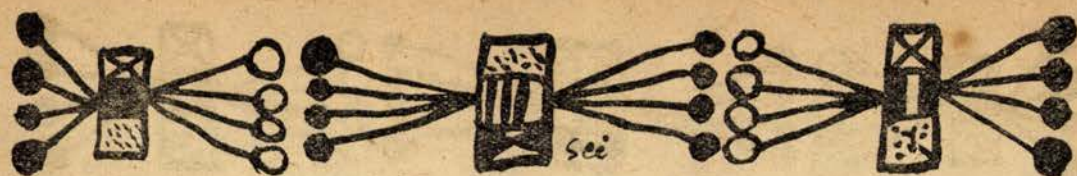
観光バス汚ない町は早く抜け

岡山市 大森 風来子

未亡人男袴で勤めにし

大阪市 木下 幽王

くすぐつたや妻がマダムと呼ばれて居



あら、三人で一人前食うて去に
留守と思はせちやならんぞと旅に出る

商賣仇同志おたくらは

大阪市 水谷竹莊

馬券買う女も派手な松の内

下関市 弘津柳慶

汚職する身分になつて見たくなり

パチンコへ妻もさそつた日曜日

有難く頂いて行くなぐり書

宇部市 国弘半休

道巾え電柱だけがのこされる

自己紹介君もやつぱり逆境か

八代市 佐野ト占

デモ避けて総理は雲の上を飛び

パチンコも夜業時間の中へ入れ

兵庫縣 小西無鬼

お花にもお茶にも彼氏へも通い

かけひきもなく目覺しに起される

眞剣にあやす坊やに欠伸され

京都市 大鶴喜由

だからですねということばなどまねて

夫が呼ぶが姑捨てとけず

また入齒が飛ぶかと思いつつ笑い

出来そうもない女ならくさしとけ

吹田市 野本香水

田が消えた学資と知らずのみ歩き

事故現場見て来た妻は酒をつけ

朝日の袖へ無事な掌のひびき

組は白く乾いて妻の留守

大阪市 土井文蝶

パチンコの負が削つた副食費

その当座丈のつもりで身を任せ

我も亦凡愚の一人酒の酔

尼崎市 小林文月

卒業だぞだと母の忙しく

札幌市 山根白星

年寄りのキョトンと縁に座すもよし

路地裏の闇へラスコルニコフめき

熊の子を飼つて營林署員住み

足洗う夢もけなげな貯金帳

春うらら代書は判を掃除する

手を添えているが不満な木馬の子

大阪市 富岡淡舟

三等社員また前借をして帰る

いつてらつしやいと出して隣りで喋つて居

用件を忘れるほどの月の道

恥を知る男それから訪れず

憤然と抗議すれども独りぼち

大阪市 飯降白香

冬眠を食りまめな勤務ぶり

奈良縣 西辻竹青

どうしたのこのごろ酒も遠ざかり

老妻と歌舞伎文樂松竹座

山口縣 長野井蛙

ニコヨンの怒声を鉄原ははね返し

この雪へ生きねばならぬ足袋をはき

布施市 森下愛論

新婦を信じ姑の気がゆるみ

岡山縣 直原七面山

愛された日もあつたわと妓酌ぐ

アベックが振り返つてゐる湯の煙

二号とは悲し晴れては見葬れず

叩かれても蹴られてもよし恋は逃さじ

駆落でおどし心中でまたおどし

老らくの恋は眼鏡にちりを溜め

黙つてれば黙つていたで妻ヒスリ

デコレーションケーキにも似た娘の化粧

秋刀魚々々女同志の二階借り

映画 山の音を見て

男には美しすぎた妻の愛

大阪市 西森花村

寒行のくしやみ残して辻曲る

ひつそりと猫だけ寝てる春の部屋

汚職記事チボも一緒に腹を立て

冬山は楷書で書いた矢り様

鳥取市 河村日満

四捨五入して送別の辞を終り

送別の宴に答辞はとだえ勝ち

宿題を父は結論からあわせ

出雲大社へ団体参拝をして

参拜へお蔭は狐雨で済み

ネクタイも服も酷使の二十年

兵庫縣 家沢薔花

鼻の差で勝つた話をあんまきき



MSA 眠る武士道呼び起し

大臣の弔詞が続くいゝ葬儀

蟬曳の時間は矢張り午后で云い

九十まで生きて心臓麻痺で死に

東京都 藤 本 満 年

妻なれば吹雪の中へ使する

淡雪は梅の花散る如く降り

刑事より鋭い妻の御眼力

禁酒した途端招待続くなり

熊本県 西 口 如 川

切り賣りをしてる見たいにストを出し

惜しくない名譽だ愛の巢にこもり

岡山県 福 島 鉄 兒

かろうじて息をして居る便りが来

金の要る話へ父の突りよう

産制を二号あく迄押し通し

もうお止しなさいと銚子持つて来す

東京都 藤 本 茶 々

ぼれるぞとタクシー雪へ走り出し

病床の静けさ雪は降りつゞき

しん／＼と降る雪しんみりお茶をのむ

ざあますで受けられ舌がもつれかけ

病床雑詠

スキ焼へ病床からも賛成し

病人の外の食費をけづりかけ

子らのため母こそ長生すべきなり

大阪市 西 いわを

悪口を酒の肴にのみつゞけ

人品は賤しからねど二級酒

亡夢裡氏を憶う

童顔へくすれに笑ひ声を立て

岡山県 横 部 牛 歩

眞先に來て眞先に下戸婦り

通知した時間を主催者も忘れ

代表の髭のないのが物寂し

長生きの血すじと知らで保険屋来

再婚の連れ子義理の子今度の子

岡山市 服 部 十 九 平

オンリーの自尊が與太を寄せつけず

お便所へ坊やを荷物の様にさげ

長生きをしそんで二号考える

尼崎市長 長 谷 川 三 司

板場ひま木の芽を嚙んで吐きすてる

金で済む事さど金はないのなり

ボーナスの及ばぬ値だけ見て歸り

熊本県 有 働 芳 仙

ギター抱く間孤独に灯がともり

パチンコの音場末から風に乗る

さくらだけ買つた所で客は散り

高知市 大 西 迷 窓

僕の代になつて借家に母住ませ

寄り添うて行つたを女房見てたらし

私も吞みたいわと或る日の妻

下関市 阪 田 良 坊

なぐり書惡しからすだけよく解り

無理やりに吞ませて後をうるさがり

下関市 石 川 侃 流 洞

博士号助手であつた日の回顧

生き甲斐を機械の音の中に知り

広島県 山 田 季 賛

金と暇あればと思う子沢山

寒鰯の釣れないまゝでこんがよし

大阪市 山 本 葉 光

消炭をつぎたし珍客座らされ

修繕のきかぬ生命が恐くなり

大阪市 鈴 木 天 貧

子の数を意識して買う盛蜜柑

美辞麗句ほんとの吐は馬鹿くさく

雨もまたたのし絵になり詩が生れ

倉敷市 木 村 千 容

漆負けおそれ御大よりつかず

用始め社長は叱言一つ云い

氣の毒なけれどと辞表とられどり

徳がないとは氣づかずに淋しがり

ヴァージンと別れた朝湯すぎとほり

縫目あるので素足ではないらしい

呉田海軍工廠出張

値踏みされざる鉄骨のあわれなる

抗議するように起重機錆びていた

短剣のない旧友の瘦せた腰



石川県 那谷光郎

生き飽いたなどは嘘の養命酒

昇給する迄はと窓のまゝでいる

紅い爪伯父に意見の茶をつがれ

ロケーション以来山の娘派手になり

弔辞よむ声のふるえも弟子らしく

臭いものに代議士蓋をしそこねた

堺市 八木摩太郎

卒業を待つてた母の三回忌

高槻市 福田丁路

改名はしたが貧乏つきまとい

夕食を狙うた様に行き合せ

倉敷市 水谷谷水

お身の上創作として拜聴し

あんなは御家あの方は未亡人

地下足袋のあんな女が媚を賣り

すゝきにも似たる風情で帯をさき

ニコヨンの恋がキヤラメルすゝめてた

倉敷市 相原一善

双児でも産みたい心温泉につかる

初雪へあいにく酒は切れたとこ

岡山県 田村藤波

此の宿で去年は「さん」と呼んだ妻

呼水のつもりで賄賂持つて行き

妾宅へ通うた自動車賣に出し

岡山県 岡田夜潮

スイツチを切つて伊達巻足袋を脱ぎ

焚火跡一人居残る失業者

食い残し集めて末座まだ唄い

團体の泊り衝立押ししける

お隣りと話が出来る裏続き

岡山県 岡村牛耕

ウマ／＼が云え出した子へ手ぶらで来

貰い風呂小さくなつて沈んどり

あつち向いて居てね鉄砲風呂へ脱ぎ

土耳古風呂ちうのへ行つた話をし

三人の男へ笑顔使い分け

泣いて口説けばあらお上手ね

香のけむ喪主の襟足綺麗すぎ

再軍備又糠パンを喰わす気が

招かざる客も予算に入れてくみ

茨木市 下山清潮

エプロンの好きな女房で先づ達者

馬ですりボートで勝つてランドセル

月賦々々俺のへそくりへるばかり

大阪だ月賦のラヂオが鳴り出した

岡山県 本田恵二期

炬燵から明治元年差図する

ボロ倉庫藝術写真に返り咲き

名医とは誤診誤診のなれのはて

大阪市 眞鍋一瓢

厄介な人だが死なれても困り

どう生きようかと女セツトをして来たり

終電の降りるばかりも淋しくて

一せんめしののれんが寒い／＼町

老課長牛が尻尾を振る如く

トラツクが行く劇團の人と荷の

フレツシユな感じを出せば風を引き

御趣意だけ承りますす冷たかり

色白を胸とは知らずほめちぎり

何で食う人か梅見に出かけたり

夜の鳥の啼けば地を裂く声となり

夜業したのをほんまかいなと云われる日

唇の塗料過ぎたりはばてたり

どうにかはなると二人目も生んだ

京都市 松川杜的

狭き門幼稚園から気をもませ

パチンコから帰れば母は手内職

便所にもカレンダーを貼り時惜しむ

豊中市 村上ゆする

値下すりや芦屋夫人は敬遠し

出しやばりのくせに小さなきもつたま

スナツプへげんこ大きく写つとり

妓座をはすせば商談むし返し

停年が近くおんびん主義にかえ

鳥取市 森本法泉子

幼稚園泣く子笑う子描いてる子

幼稚園一人は山の方を向き

幼稚園うちの子ばかり踊つてゐる

年末は歯痛年始は中耳炎

倉吉市 日置文郷

取り敢えず事実無根と云うて置き

有難いが口では母を叱るなり

グローブも持つて勤務医家を出る



大阪府 小池しげお

二次会の会費子供の服が買え

紅つけていても四十の顔であり

スケートもスキーも出来る恋敵

兵庫県 竹内圭三

げんこつの腕の細さをじつと見る

十年目御家さんも来るクラス会

子が出来てからは希望がちとかわり

スランプだスランプだとて飲み歩き

いゝ話税金込みの額を云い

倉敷市 松村万古

大声の方が形勢不利らしい

壁のような相手で卓球悲鳴あげ

只一人となれば炬燵眠くなり

眠つたら宿に上下のないものを

倉敷市 藤井春日

言うならば勇退しろとの謎だつた

一幅はせめて形見と残しとき

喜んで呉れと一本提げて来る

大阪市 木口賀峰

採用を断るのにも託びが要り

独身寮ヨモトニツクの瓶はから

ポリまでがベタル止めてる焚火の輪

信じてた人が連れ込み宿から出

岡山市 津田麦太楼

引つくり返しひつくり返し蘭枕汚ながら

奥さまも盗人の糞を覗いて見

刑事部屋狸の皮を敷いておる

若旦那と同年の子がある女將

葬儀屋も朝晩拜む神があり

米子市 小西雄々

窯を出るときにきまつた賣れ残り

年度末歩をつく様に異動させ

山青く密航日本にきたと知る

先生の膝へチョココンと兒は坐り

長女出産

母としての一声指はありますか

吹田市 橋本幸男

出世した子に連れられて伊勢参り

元軍人不動の姿勢のまゝ話し

グループが違うか話もしてくれず

闇米を運ぶ老婆の襟の垢

岡山市 三枝一策

集金へ下さる様な世辞も要り

不貞寝したまでは良かった腹が減り

大阪市 森文夫

用事より基が打ちたさにやつて来る

商用で来た町雪見酒になり

酒でごまかすつもりを女からみつき

大阪市 吾郷玲人

ふる里の不幸へ急ぐ借り衣裳

ミスをした事風邪気味にしてしまい

酒代も込めて見積る復旧費

焼酎とパチンコに春を謳う人

告知板処罰づくめを塞う讀み

盃の乾く暇無し君と僕

岡山市 岡田青果

晴耕雨読小雨に読んで叱られる

小説のモデルになつた不仲

もてなした酒も肴も吐いて去に

この道が国道バックばかりして

大阪市 若本多久志

計量器力んで見たが十二貫

朝鮮の言葉で汽車がよいい泥み

行先の言えぬネクタイ軽く締め

麗人を求むへ厚顔し

同舟近詠

松山市 前田伍健

羽子板へ一句かけとは酔興な

騒々しく儲けています製材所

柔道場あくまで四角四面なる

道後動物園

すぐ値ぶみされるライオン仔が産れ

大阪市 橋本緑雨

廻転椅子にて

ひまあれば聴視なんどを考える

大阪トルコ温泉

胴体をむされながらに世を話し



窓口談義

麻生路郎

私はここで、編輯局で働いている人たちのかけの苦労がどんなものであるかについて、少しく話してみたい。どんな薄ッぺらな雑誌でも、編輯から本になるまでにはなみ／＼ならぬ苦心が払われているのである。

私の筆底に次のような編輯部員に対する指導要項の一片があつたので参考のために掲げて見よう。

A・「とこ」と「こと」と書き間違えぬこと。

B・送り仮名注意。

C・仮名遣注意。

D・原句の文字、真字を仮名に、仮名を真字にしたりしないこと。

E・誤字、脱字など無きように注意。

F・字をくずさぬこと。

G・写す句を左手の指でおさえてうつすこと。写したら読みかえすこと。

H・写す句をアンキして書かぬこと。

I・前書がハナレタとこにあるかもわからぬので抜かさぬこと。

J・最後に、清記者外の人に、清記原稿を渡して原句との読合せをすること。

こんなことが根気よく書きならべてある。これは選者が投句の選を終えて、編輯部員に渡した際、編輯部員がそれを清記する時に与えられた注意である。

Aにしても、句を清記する際、

「とこ」と「こと」とを書間違えぬようにと云うのは、

その一例に過ぎないのであつて、外にも斯うした書き間違え易いのが随分多いので特に注意したのである。

Bは送り仮名が随分減茶なので、出来るだけ正確にするように注意したのである。新聞などの乱暴な送り仮名がわざわざいっているとも云える。慣用されるとウソから出たマコトと云うことになりそうで、

あまりに嚴重なことは云えない。どちらでもよいような場合には本誌では作者を尊重することにしている。

Cでは文章は特殊のものをのぞいては現代仮名遣にしている。句は主として作者を尊重。一句のうちに混合している場合は現代仮名遣に統一している。今は過渡期なので、これより他に方法はないと思う。

Dは原作者の文字に対する音感を尊重する意味から原句通り

にするよう注意しているのである。

Eは云うまでもないこと。

Fは清記者の筆癖で活字を拾う上に誤りが出来るのを防ぎ

ため。

Gは清記の際に、一句の途中から隣りの行の句にうつつて、

写し間違えをするのをふせぐための注意。

Hは清記する句をアンキして書くのと往々清記者の句調に訂正され、誤記されるおそれがある

ので、それをふせぐためである。

Iは数句の前に前書がある場合、見落すことがあるので注意したのである。

Jも清記係の誤記を発見するの

に役立つことは云うまでもない。

斯うした編集部の一部分の仕事、清記と云うことだけでも、用意周到でなければ完璧を期することは出来ないものである。これほどに注意しておいても、校正に於て見落すこともあるので、校正に至つては、清記どころの騒ぎでなく、更に多くの注意を要するのである。

私がここで楽屋裏のことを発表したのも投句家諸君の協力次第で、

どれだけ清記係がすぐわれるかも知れないと思つたからである。

これもよりよき雑誌をつくり上げたい念願の表われに外ならない。

読者倍加運動について

みなさまにお願い

近ごろのきびしい世相から考えても、本誌の使命のいよいよ重大さを想わされるので、本社はこの「愛読者倍加運動」を展開することにした。川柳雑誌社といたしましては、総力をあげて目的貫徹に直進することは云うまでもありません。と同時に愛読者の皆様の強力な協力添えがなければ、到底なしとすることが出来ないことを痛感いたして居ります。堅実な発行と内容の充実、誌価の低廉で大好評を博して居ります「川柳雑誌」を一層よりよい雑誌にするために、貴方の会社の人達や友人の方々で、まだ「川柳雑誌」を購読されていない方々に、特にすすめていただきたいのであります。皆さんの「川柳雑誌」を皆さんの手でウンと発展させるために、どうか本運動に全面的に御協力下さいますよう切にお願い申し上げます。

読者應募並びに紹介規定

★読者に應募される方は誌代半々年分二六四円（十共）をお

払込み願います。讀者應募と朱書して下さい。投句用箋を

一冊贈呈いたします。この特典は四月末限りといたします。

★応募者五名以上（誌代を取編めて送金）紹介して下さい

ました方には薄謝ですが本誌三ヶ月分を、十名以上の場合は

六ヶ月分を贈呈いたします。五名に達しない場合は一名

に付一冊投句用箋を贈呈いたします。但し紹介された応募

者には贈呈いたしません。

★誌代のお払込みは小為替又は振替口座大阪七五〇五〇番を

御利用下さい。（切手代用可）

★応募者並びに紹介者は住所氏名を出来るだけ詳しく楷書で

お願いします。——川柳雑誌社愛読者倍加運動係

★入門も奥義も『川柳雑誌』から



影写の生久郎路生麻・著者の人旅

麻生路郎句集

旅人出版記念会

於阪急八階特別食堂

麻生路郎先生川柳生活五十年記念に出版された世紀の川柳句集「旅人」の出版記念会が川柳不朽洞会の主催で二月十七日午後六時半大阪梅田の阪急百貨店八階特別食堂で行われた。

真白いシート、シートの上の活花や特製の「旅人」せんべい、テーブルを取り巻く四十数個の椅子、何れも今宵の記念式を待つもの、如く静まり返っている。

やがて参会者一同着席。先生を中心に、来賓その左右に居流れ、更にそれに続いてテーブルの周りに不朽洞会員が席を占める。

定刻前会場を覗くと、正面に一段と高く、これも先生の川柳生活五十年を前にして一昨年、不朽洞会員から先生に贈呈せられ、先生御自身「胸像も主張をまげぬ面ら構え」と作句して喜ばれたあの寿像が安置され、その面ら構えでテーブルを見下ろしている。寿像の前には真新しい三宝に載せられて、今度の句集が供えてある。寿像の後には先生御揮毫の「ふるくとも僕には仁義礼智信」の句の紅唐紙の軸が掛つて、会場を一層明るくしている。テーブルの

会は開かれた。折から早春の日は将に暮れんとして、落日後の残照も消え、部屋の中には夕闇が忍びより、シャンドリヤは一入明るくなつた感じ。

先ず不朽洞会常任理事の西尾栗氏が川柳不朽洞会を代表され、リンとした声で左の挨拶を述べられた。

「川柳雑誌社不朽洞会を代表致

しまして、一言御挨拶申上ります。

麻生路郎先生の句集「旅人」が刊行されましたのを機会に、頗る盛大なる祝賀川柳大会を開催したいと考えて居りましたが、派手な集りは止めてもらいたいと言ふ、先生の御意志に添ひまして、本日茲にささやかな集りを開催することに致しました。顧みますると、路郎句集「旅人」が予期以上の大好評で、有終の美をおさめることが出来ましたのも、之ひとえに來賓諸氏並に各地賛助諸賢の御声援御協力の賜と厚く感謝している次第でございます。殊に本日は夜分にも拘りませず、又公私何かと御多用の折柄、特に御臨席を賜りまして錦上添花をお添え下さいました事は、この企をもちました私達不朽洞会の大変嬉しく存じまするところで、茲に謹而厚く厚く御礼申上げる次第でございます。さて我が川柳界に於きまして、世紀の聖典とも申すべきこの句集「旅

人」が昨年文化の秋に上梓されましたことは、各地の柳人は申すに及ばず、凡そ文学に心ある人達の瞠目狂喜致しましたところでございます。不朽洞会より先生の川柳生活五十年の祝賀記念事業の一つとして句集「旅人」刊行の報一度伝えられました時に、全国の柳人は勿論、各文化層、官公署、又は各学校の図書部よりの申込が続々と到りまして、刊行会長の中島生々庵氏の御顔がトタンに我顔となられました。又川柳とは何ぞや、人生とは何ぞやと常に冥想しておられる、路郎先生のあの御顔が余りに当然のこととは申し乍ら、そのお喜びを喜こばれた次第でありました。先生のあの凝り性と、会長の用意周到なる企画の元に夙夜兼行の準備も進捗致しまして、既に皆様御承知のあの立派な句集が出来上りました時には、凡そ今迄の数ある句集の異色篇として、その装幀に於て、その組方に於て、

その烈々火の如き或は寸鉄氷の如き脈うつ一句一句に於て香り高き句集として更に感激を新にした次第であります。之はひとえに先生の常に指導提唱しておられる命ある句の詩情溢るる調べ高き、数々の玉句があつてこそではあります、敢えて先生の御心を動かして刊行の運びにまで御多忙の中を御尽力下さいました路郎句集刊行会長の中島生々庵氏の表裏一体と同時に、路郎先生の詩精神の表れであるむづかしい注文とその意図をよく了解されまして、組版に印刷に誠心誠意御働き下さいました大阪出版堂社長の御好意の賜と我我不朽洞会の一同は厚く感謝感激している次第でございます。茲に於て、この喜びの感激を共に致し度いと存じまして、今日このささやかな刊行記念の小宴となつたのでございます。甚だ粗酒粗肴でございますが我々の喜びをお汲みとり下さいまして、御ゆつくり御

飲談の程御願ひ申上ます。誠に粗辭を述べましたが之を以て御挨拶と致します。

ついで一同の拍手裡に、不朽洞会理事長、句集刊行会長の中島生々庵氏の、寿像への献花が行われ、寿像の前に供えられた三宅の句集の上へ、花を献ぜられる。続いて来賓の大坂芸能界の長老、高安六郎博士、川柳家代表、岸本水府氏、次々と立つて祝辭を述べられた。一同その度に嵐の如き拍手を送る外は、肅として咳一つする者もない。

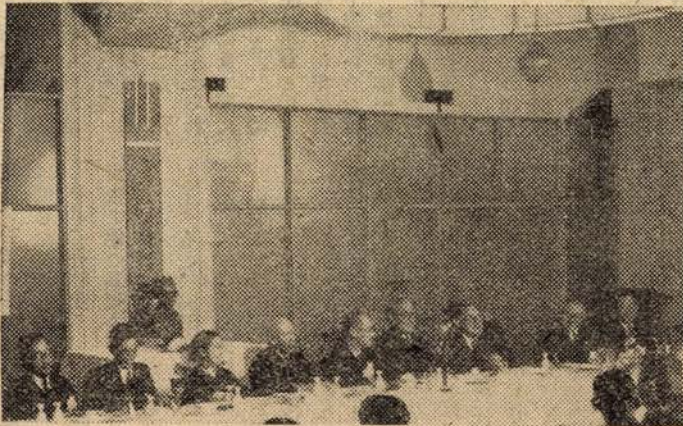
高安氏は「五十年と云えば半世紀である。自分は医者になつてから丁度五十年で、此の間多くの人を殺した」と云えば語弊があるが、多くの人の死を救うことが出来ず、医者としては失敗の方であつたが、その他に何か人の為めになることをしたい、と思つて芸能界に首をつゝこむようになり、古くから知つていた麻生氏とは関西芸能クラブで更によく知り合うようになり。最初に知り合つてからもう何年になるか分らぬ位だ。」と路郎先生との關係を明かにされ、「自分は医者の方はうまく行かなかつたが、麻生氏は五十年一日の如く作句に従事された」とその熱情を称え、又句集のあの編集や組方が御自分がドイツで見たラファエルの絵が、広いブルーの部屋に額が只一つだけ掛つていたのに感心したのと、同じ行き方であると比較激賞され、更に麻生氏の川柳に

盛られた人間愛と御自分の医者としての人間愛とは同じであると述べ、終りに、「もう五十年後第二の句集を出版されてそのお祝ひの時に、又御招待に預りたい。」と結ばれた。

水府氏は、「川柳人の代表にされたことは僥越であるが」と前置きされて、「今日は川柳界にとつてお目出度い日である。句集「旅人」は路郎君の大なき仕事で、川柳界に貢献された力は大きい。特に川柳と云うものがこんな立派なものである、と云うことを、天下に示されたと云う意味で、川柳家として有難くお礼を云いたい。更に語をついて、此の句集が世に出るために、その世話をした人や、又これに関与した人々への感謝の意を表され、次には個人的話で、路郎先生が句集を大晦日の晩に、氏の宅までわざわざ持参された暖か味から、此の句集が氏に思ひ出させた番傘誌発刊前後の様子を述べ、尙路郎先生から当時の関西川柳社の中心人物、当百氏宛の四十年前のハガキまでも持出されて、当時の先生の川柳に対する情熱を称え、最後に、「私も此の句集によつて、川柳の行方を見たような気がする。」と結ばれた。

ついで路郎先生は満場の拍手を浴びながらやおら立上つて、低いが力のこもつた声で謝詞を述べられた。「句集出版に際しては相当骨は折つたが御覧のようなものしか出せなかつた。最初句集をも出す意志はなかつた。出すならば、すばらしいものを出したかつたからである。然し周囲の方々が寄つて出して下さると云うので、有難くお受けした。むげにもことわりかね川柳をはじめて、五十年も経つてから処女出版と云うのでは、おぼこ過ぎると思う。然し今迄にも句集を出してやろうと云う、好意の人はあつたわけで、故阪大名菅教授、笠原博士がそれである。博士の御希望は私の句を読んで見たいと云うのであつた。京都からでも東京からでも出してくれ、費用は自分が見るから、との御意見であつたが、句集は川柳にしろ俳句にしろ、売れぬものと相場がきまつてゐるから、結局何処かへ迷惑をかけねばならず、私は人に迷惑をかけるのが嫌いなので、お断りした。「次には私の川柳生活四十年の折に、不朽洞会から出してやろうと云われ、私もその時には出す氣になつたが、出すならば変つたものを出したいと思

つた。丁度十年前のことであるから、戦争の最中で、然も日本の状態の怪しげな時であつた。それでも出してやろうと云われ、緑雨君が信州の松本まで行つて紙の見本を持つて帰つてくれたが、氣に入つたのがなく、私の手で群馬県から、帝室博物館に納めてゐると云



第一の景風協會會念記版出「人柳」

続人君の手で集めていただいた。表紙裏の色仙歌も氣に入つたものが手に入り、最後に紋表紙が大阪になかつたので京都へ探しに行こうと思つてゐる時に山本鋼業が戦災に遭ひ、全部が灰塵に歸した。いろ／＼と世話を下さつた方には申訳のないことではあつたが、私としてはホツとした氣持であつた。「これでもう句集の話は終つた、と思つてゐた所が、今度は川柳生活五十年に際して記念事業として再び句集刊行のことが不朽洞会によつて決議された。その前年には寿像を作つて下さるし、又昨年の五十年の春には近鉄百貨店で短冊展をや、秋にはとう／＼句集の出版と云うことになつた。それもお前の作りたいものを作れ、と云われるので、田村（幸之介）君に厚顔な頼み、表紙は自分のカラーを出すために私がやつた。中の編集や組も思うようにやり、写真も写真屋にも撮らしたが氣に要らなかつたので、某新聞社のカメラマンにお頼みして撮つて貰ひ、何枚もの中から氣に入つたものを用いた。印刷の方がどうかうと思つて下さる大阪出版堂の主人に、うまいことぶつかつた。「只今も句集のことを色々とお褒め頂いたが、これは過褒である。今後は余生のある限り、一層頑張つて、川柳のためにもう少し仕事をしたいと思つてゐる。私が川柳を始めたのは、川柳が面白い

う一枚きずきの和紙を手に入れ、それを大阪へ送つて来させて、丹路君の勤務先の山本鋼業倉庫へ保管してもらつてゐた。型はB列5号で絹糸で和綴じにしたいと考えた。しかし絹糸も手に入らない時であつたが、これも戦死した



花柳・子食民・鈍色・方右・美站・香宗・藍文・列中一 三正・太鼓・子梅・呂加伊・藤々生・府水・郎六・郎路・乃藤・東梨・井島・哲一より右でつ列前
氏蔵の莊竹・村花・母漢・羅明・志久多・なわい・三浦・天鼓・司三・路丁・子柳白・林春・永彰一列後一 山貴・郎天摩・葉・國松小・藤藤・介宜・萬道・星春

明説眞享

からであつて、本職とするためではなかつたが、それがとう／＼本職となるまでになつた。かつて私は、二合三勺問題のために、代議士に立候補したこともある。私は物に熱を持つたちなのである。職業は二十以上も転々と変つたが、職業はめしさえ食えたらよいと思つていたからで、川柳だけは五十年の間変らずにやつて来たのである。」

尙最後に先生は、「夢」を持つてゐる、と夢の話をされ、その実現に協力して欲しいと、希望され、「今宵は川柳界「粒選り」の方々の出席を得て、嬉しさこれに過ぎるものはない。」と感謝して語を結ばれた。

次に刊行会長長中島生々庵氏が立つて、「此のように多数の長老、先輩の御参列の下に会が開かれたことは、感激の至りである。」と謝詞を述べられ、語をついで句集出版のいきさ

つに及ばれ、「先生の句集刊行は、先生のお話にもあつたように、終戦前に刊行一步手前まで行つていたこと、終戦後氏が川柳不朽洞会の理事長になられてからも、決して等閑に付してはいたわけではなかつたこと、又他からも刊行して貰いたたいと懇願を受けていたが、先生御自身快諾されなかつたこと、先生の川柳生活五十年記念に、此の機を逸してはもう句集の刊行は出来ぬものと、刊行の企画を先生に無断で発表したこと、発表後も先生は中々快諾を与えられず、門下生の実績を先に世に聞えと云われ、又後日快諾された時も、半分の頁を先生の句集とし、残り半分は不朽洞会員の句集に当てるように、と門下生思ひのお言葉を下さつたこと、常任理事一同は、此の言葉に感泣し、此の機を逸せず役員を決定し、没食子、摩太郎氏両氏に此の役を押しつけ、殊に摩太郎氏の如きは、蛇の如く先生に巻きついて、句集の原稿整理の助手として従事したこと、更に句集発刊大成功のもう一つの原因は、良心的芸術的印刷所、大阪出版堂を見付けたことであること、等を縷々述べられて、私が刊行会長として、此の来賓席に坐るのは、丁度仲人が花嫁さんの席に坐つたような場違いを感じるのではありません。」と語を結ばれた。生々庵氏は引き続き大阪出版堂主人中井藤蔵氏に感謝状並に金一封を贈られ、中井氏亦これに対して謝

辭を述べると云う劇的なシーンが展開された。

こゝで司会の香林氏は開宴を宣し、一同盃を上げて乾盃、飯急食堂自慢の料理に舌鼓を打つたのであつた。今迄静かに傾聴していた一同は、口々に今宵の目出度さを語り、祝賀の気分はこゝに最高調に達した。

やがて香林氏が、会場の時間の都合で他の来賓の方々のスピーチは、食事をしながら拝聴したい旨を述べると、脇田梅子女史が先ず立たれて、女性の立場から、「此の句集は女性に読ませたい句集である。」と讃辭を述べられた。ついで「ふあうすと」の梶元紋太氏、毎日新聞学芸部の永井正三氏、「せんば」の岡橋宣介氏、「さつき」の坂澄風氏等次々と立つて、祝辭を述べられれば、不朽洞会員中からも、井上湧三博士、牟田一哲博士、田中島耕博士、高鷲重純氏等が立たれた。

かくて楽しい時は早くも過ぎて行つて、既に会場閉鎖の時刻が来たので、最後に路郎先生が立つて重ねて謝辭を述べられ、香林氏から、島根県尼緑之助氏外十数通の祝電の披露があつた後、高安六郎博士の発声で路郎先生の「万才」を三唱し、水谷鮎美氏の閉会の挨拶で、有意義な記念会の幕を閉じたのであつた。

（北川春集記）

その夜の小感

中島生々庵

「旅人」刊行記念会の夕、来賓御案内の六時より三十分も早く水府伊知呂氏がトップに会場にお出で頂いた事は此の上もなく印象的に嬉しかった。

懇々開会になり来賓各位から次々と御祝辭を拝受したそのお言葉には今更の様に恐縮、殊に刊行会長と云う肩書で来賓席の隣りに座らせられた小心者の理事長寢に座り心地が不安定、それに加えて宿願叶つた感激に胸が一ぱいになつて申上げる謝辭もあれやこれやとまとまり難い。

御出席の方々には、恐らく気付かれなかつたと思うが、路郎先生寿像の前の「旅人」へ献花の儀を行う折は、熱い涙がこみ上げて終つた。次で大阪出版堂の中井社長さんに感謝状をお渡しする時はとう／＼声がふるえて絶句しそうになるのをどうとも仕様なかつた。やつと読み終つてお手渡ししながら、じつと見つめて居ると心なしか中井さんの瞳にも熱い光るものがチラリ。

ほんとうに抱き合つて頬ずりもしかなない衝動の一瞬だつた。私にとつて一生忘れ得ない思い出の一つとなる事だろ。

やつさもつさ

土井文蝶

夜来の雨もからりと晴れた。今日

は句集出版記念会当日である。矢張り路郎先生は日和男なるかなである。待つ間程なく生々庵氏愛用の自動車が本社へ横付けになる。そこへ来合せた摩天郎さんと路郎先生の寿像を会場へ運ぶ。台石を持つた摩天郎さん重い〜と階段を昇つたり降りたり、会場へ安置してやれ〜。良久似てゐるなあと今更の様に見入る、バックの、

智信 路郎

の句にふさわしく会場に一段と精彩を加える。やあ神主さんが来た〜の声に振返つて見ると白柳子さん、祭壇を持つて現われる。栗さんが風呂敷包を持つて到着。それ何んや、開けてびつくり玉手箱、今日のためわざ〜焼いて呉れたせんべい「旅人」これには準備委員一同声を上げる。

準備難感

黒川 紫香

勤務先の都合で会場の交渉と準備と云う大役を仰せつかつたものゝ当日会社の会合と重つたため、四階と八階と阪急ビル内をかけ持ちして、てんやわんや、先生の寿像を大切に抱えて文藝、摩天郎両氏早くから来場される。

あ〜でもない、こうでもないといふ三人文珠の智恵をしぼつてとも角準備完了、一旦四階の事務所へ戻つて再び来ると入口でばつたり栗氏に逢う。御苦勞様です。会場はどうぞこちらへ〜と云つたとたん

気がつく、先刻御当番と見えてオーバーを着て居られず、手洗いかから帰られた姿で、御恐縮の様子……。

飾られた「旅人」

武部 香林

待望久しき先生の句集「旅人」は遂に刊行された。「旅人」何と云う親しみ深い名であらう。

北大阪は阪急特別食堂で出版記念会が催されたのは暖冬二月の半。娘の結婚式に望むように、心はずませて会場へ行く。ビル内四階の紫香君のオフィスへ這入る。白柳子さんが祭壇一式を白布に包んで早くから乗込んで来る。三人は八階の会場へ。やがて白布も鮮やか祭壇が設けられ、先生の寿像がは〜笑まれる。其前に装いも新らたな旅人が飾られた。

栗さんの挨拶に次いで献花の儀式をやるのだが、階下の園芸部が花の様式を知らないのに一寸困つた。やつと蘇鉄に白菊を選定して八階へ上ると定刻だ。各地よりの祝賀電報を日本語のホンヤクならと引受けてくれたので、小松園さんに頼む。料理部へ飛び込んでみれば「パンが焼けすぎますよつて」と急がすコック長を待たせて開会に移る。

寿三番更ならぬ生々庵氏の献花は緊張裡に行われた。

路郎先生の熱弁による謝詞はお欣びの一語に尽きてたが爾然とお祝いの頭が下がる。再び生々庵氏

の熱弁の最中、来賓主席の高安六郎先生、その両眼にハンカチを当てられた感激は全く劇的なものであつた。

温かく麗わしい心の交錯は「旅人」出版によつて尽されたと思ふ。摩天郎氏の、この会に於ても尚行届く藤の活躍を深き感動をもつて酬いずにはいられない。

其夜のお茶菓子風流煎餅は、白砂糖で旅人の文字を浮き出した栗さんの傑作でこゝにも同氏の心尽しをほのぼのと味つた。

ルオと日展

戸田 古方

ルオと日展とつゞけてみた丁度その頃「旅人」がインクの香も新らしく世に出ました。一頁一頁をくるのが惜くてたまりませんでした。日展のあまりにも写実的写真に對してルオの迫力、全く圧倒的でした。精選せられた写真、写真とを抜け切つた写真には全く頭がさがります。ルオに発見される大衆への共感「旅人」にみられる写真であり共感でありました。

川柳は只の楽しみではじめたとしても只のたのしみで終るものではないとあります。人生のためのものと信じています。商品価値は勿論、所謂芸術的価値をも突き抜け打超えたところに凡聖一如真の川柳があり「旅人」こそその聖典なのです。そんなことを考えながら乾盃し先生の万歳を叫びました。

殊勳者

菊沢 小松園

「本句集刊行に就いて最も偉大なる殊勳者は、実に此処に居る摩天郎氏でありまして、ある意味で先生に緊かり絡み附いて、蛇の様な執拗さを持つて、その刊行に努力されたことは不朽洞会全員の認めるところであります。」

例の扱い太い生々庵氏の声が場内に響くと、期せずして一同の眼は摩天郎氏の方へ注がれた。大きい体を小さくして肩をすぼめた摩天郎氏を来賓の人達も我々の視線も、その体を逐つて優しく舐め廻わして居るようだ。

浅春の夜空に外は冷たい雲が乱れ流れて居ても、ガラス戸一枚の場内には、温かい人々の心の交流に感激の一瞬だつた。世紀の句集と共に、何時迄も忘れぬ印象として私の心に残る二場面であつた。

祝賀会の末席に入れた戴き特に私の感銘しましたのは、各名士の御挨拶の中で岸本水府先生が、四十年前に？路郎師から水府氏

の恩師故西田当百氏に宛てた音信を出して読上げ、関西川柳界の両巨頭の交わぬ友情のほとばしりの程がうかがわれて目頭の熱くなるのを覚えました。

銘菓旅人

市場 没食子

路郎先生の世紀の句集「旅人」の刊行記念会に遅れてはならじと、いつもより二時間も早く勤務先を出て、会場に来て見れば、受付にいた摩天郎氏が「親分遅いぞ」と笑つて叱つてくれた。でも外の委員で僕以後ぞ〜と顔をさせる人もある。しかし委員長としては遅いのだろう。何にもかも片付けて引受けてやつてくれてゐる氏の友情がこんな言葉の中にも表れて嬉しい。やがて席に着けばお目出度いお茶菓子に白砂糖で旅人の字が浮び出ている栗氏の好意の発案である。処でこの菓子を正月用等にこれから柳人は用いるこ

富岡 淡舟

いつものがいに富屋へ電話なり

せんは

富屋

御集会用にも御用命を

大坂東と唐物町と井地

電話新場(5)三二八八番

清葉子



富屋



人間横丁 (XII)

香蘭の將軍

東野 大八

五年ぶりで私は故郷の母に逢つた。復員してきたときも六年ぶりで逢つたが、そのときよりも今の母は一層小さかつた。まるでしぼんだ広告風船のように……私は哀れなまでににかそかな、この人の姿をみたとき、とつさにこの責任のすべてはわが身にあるような気がした。そのためか私は小さくなつて……だ……とそれだけをいつて深く頭を下げた。しかし母は針仕事の手も休めず

「あゝ、お帰り」と毎日逢つてゐる人にいうように答えた。

大陸の六年も、それからこの五年も、私はこの母に、まともな便り一本認めたことがなかつた。しかし母は、その不肖の息子を前にしても、何一つ小言を口にしないのである。元氣な顔でいる、たとえそれだけがこの老いたる母の、息子への気持にちがいない。だが、お帰りといつたその眼が、なんとわなしに私の片袖にくるのはやはり親。

「やつぱり無いな、片手……」

「あゝ」
「私は答える、合つたお互いの眼が、そのあとで何となく微笑する。意味深い、しかし強いて明るく……」
「この前にはどなりつけられたが……」
「そうやつたかいな」
今度は母の方が他愛なく笑う。

戦地から帰つたときだ。泥だらけのリュック一つに、よれよれの軍服、しかもその片袖はフタリと肩先からブラ下つてゐる、瘦せほうけた頬、落ちくぼんだ眼、その息子の姿を前にしたとき、この老母は、ジロリと冷たく一べつをくれたと思ふ瞬間まるで絶叫するようになりわめいた。

「片つぽの手はどうした、戦争に出すときは、ちゃんと私はみんな揃えて出したはずだ。ばか奴、落した片つぽをもらつてこい、東条のアホに……」
果然と立すくむ私の眼に、母の小さい顔が、みるみるうちに涙にまみれた。昂奮に上ずつた手は、表戸の格子のさんをひしとつかん

で小ささみに震えてゐる。母にとつて、このわが子の惨めな姿は、何にもまさる最大の侮辱ではなかつたか、私もいつか唇をかねて、母の顔を一通ににらみつけていたが、それは、次第にぼろとすすんで行つた。やがてハラハラと他人の涙のようなものが、頬からも雨のように降つてきた。

「あのときのことを思うと、お母さんは怖かつたな」
「だつてな、東条のあほが……」
母はおはこのそれをまたもいつて苦笑する。
その夜、私は母と一つ寢床に並んで寝た。果して何年ぶりだろう。幾度も幾度も夜具の裾を直し、私の肩先にかい巻を引上げながら母は眠つた。

——併せ母のいびきの横で知り私のこれは旧作だが、この句は母のいる限り、いつも私にとつては新しい、私はそう思いながらしみじみと、老醜とも見える母の寝顔を眺めつづけていた。すると、母の叫ぶ「東条のアホ」のその貌が、現像液の中の印画紙の映

とにしたらと思つた。主催者不朽洞会員も招待者も喜びにあふれてゐる面持ちは川柳ならではの感を深くした。生々庵居のそばには全くど肌を抜かれて嬉しい事限りなしであつた。

出版記念会風景

八木摩天郎

ねこと鯉節

二月十七日午後九時、今や出版記念会が終ろうとする最後のシーン、上機嫌の路郎先生再びのチーブル、スピーチ「川柳を以つて争い

カメラのレンズの位置を熱心に決めていた写真屋が、足下の電線に足をひつかけて倒れた。写真機も倒れ傾いた一瞬、写真道具大事と、三脚を握つてのフラインブレ、誰れ云うともなく餅は餅屋やなアと讃美を惜まなかつた。

壽像の台石は重たい

先生の壽像の台石を会場へ運ぶ役を引受けた迄はよかつたが、会場係の阪急の紫香君の部屋を探すのに、エレベーターを横に見て、上つたり、降りたり、何階や聞いて置かなかつたのを悔いた。台石を置いて留守に紛失したらと小さな責任感！脊の高さでは負けぬ私も、力の無いのに八階迄、すべての百貨店の階段……今更ながらエレベーターの有難さを発見した醜体。

旅人のしおりま

西尾葉さんの「旅人」と云う玉子入お菓子は、生氣潑刺たるわらびを配してお顔とで大好評、野郎ばかりで、つまみ菓子にも気の付かなかつた係を感じさせた。序でに旅人句集のしおりもとは誰だ厚かましい事を云うのは……

像のように、母の向うの空間に次第にハツキリと浮かび上つてきた。その顔は東条、東条英機：私はこの人間を知っていた。

一九三八年（昭和十三年）四月、私は新京（今の長春）ダイヤ街料亭香蘭の一室で、羽織・袴に威儀を正して坐りつづけていた。衣裳は杜長の借りもの、着付は退役陸軍少将の娘だという、その夫人が入念に手を入れてくれたものの。時に二十四歳、五分刈頭の私は白扇を手に、今や遅しの態。思えば結婚式場に臨む花婿そのまゝだった。滑稽なほどの緊張感、無理もない相手は今を時めく関東軍参謀長東条英機、案内の杜長も上つたものか、部屋と間違えて二度も押入れをあけたほどの相手だ。私は杜長の先導で、彼からインタヴューをとらねばならぬ。足はしびれ首が痛くなつた二時間半、やつと私は二部屋奥の將軍の間に通されることになった。

部屋に戻つたのはベタ金の軍服と杜長にすばらしい美人の仲居の三人だけ。一礼して恭々しく頭をあげると、おなじみのあの顔が膝を折つて坐つていた。その顔は、艶黒々と艶々しく皮膚には張りがあり、広い額と鼻先は部屋まの眩しいばかりの春灯をはじいて光つていた。

「この人かね」

私を前にしてベタ金は、重々しく杜長を顧みていつた。ハ、ハイといった調子の返事で、杜長は卑屈なほど頭を深く下げた。

「いゝ青年じや〜」

ぼつりとそういつて、じつと眼鏡越しの眼を私に据えた。若い私はその眼の先で、またもなんとはなしにべこんと頭を下げてしまつてた。

その頭の上で「一こんさしたいが、わしはサイダーで」と相手はいつたが顔を上げるとニタリとしたとこだった。会話はわずか十分ですんだ、記事にするところの騒ぎではない、向うが「じやあ、これまで」と二口三口も話さぬうちに切り出してしまつたからだ。

「いやなあに、閣下が記者ずれのした奴は嫌いだ。若い頼母しそりなのをよこせというんでね、君は五分刈だし、紋付着せれば天晴れ壮丁と見えるもんだからねと杜長は後でそういつて笑つていたが、早々にして追ばらわれたのは、私の袴の紐の結び方がいわる襷式結びだったというのが理由だそう。これはもとより私の責任ではない。

「閣下は怖ろしく細心巧緻でね、相手の服装を何よりも気にするのがクセだそうだよ。」

今思えばそれで助つたのだ。こ

んな男と妙な具合にじつ懇にでもなつた日には、私は死ぬまで後味が悪かつたろう。とにかく今日のこの身に、このベタ金の軍服がしてくれたとそのとき判つていたことなら、私は全国五十万の傷病軍人になりかわり一世一代のゲンコをふり上げる処だつたろう。

「東条のアホ」か、私はこゝまできて、また母の寝顔へそう心の中でいゝながら笑ひかけていた。そして案外この言葉は、息子を戦場に送つた日本の数多い母の言葉のすべてかもしれない、とそう思うと、今度は私が、母のかい巻をそつと引上げてやる番だつた。



熟眠できますか？

不眠症・神経性不眠症・神経衰弱・ヒステリーの方に

カルモチン錠

30錠(80円)・100錠(1,000円)



挨拶したら

嬉びの先生！嬉びの余り腹乃先生に、「お前も一言挨拶したら」と云われた。早速腹乃先生立つて「有難う御座いました」に満場大拍手、五十年集出版記念会に、ふさわしい状景。不朽洞万歳！！

つまり病氣でネ

会の終了後、中島博士の生々庵居で、メートルを挙げる。どつから引張り出したのか文蝶さんの割烹着、否、診察衣を着けたサビース振りで、一同をあつと云わせる。文蝶さん曰く、診察か、ハア、それはつまり病氣でねに大苦笑。

つまり胃が弱いの人やと
突き離し（路郎）

閉会のあとさき

水谷 鮎 美

この記念すべき祝賀宴会のまさに終らんとするとき、閉会の挨拶をうけたまわつた私はほんとうにうれしさが渾々と湧くおもいがした。記念撮影のために数段にずらりと関西柳界の巨星達が、みな「吾がことのように喜色満面に笑みをたゝえられてレンズの方を見ていられる。私は今までの酒宴のテーブルや椅子を、写真屋さんの助手よろしく取片付けをしなから、レンズの位置から諸彦を眺め

ると実に柳風堂々たる偉観であつた。私の網膜にしつかり焼付られた今宵の情景は永遠に忘れられせん。写真屋さんは忙しく右往左往している。緊張きつた仲に、誰彼なしにうれしい飛躍の言葉で

「こんな素晴らしい情景見たことがない」

「さすがに路郎師は日本一や」

「いや世界一や」

「テレビで全国の柳人にこの場の情景を見せたいなあ」

これだけは残念やなあ等々などやかに言い交されていた。

写真のゼスチュア巨星撮される

私の本役がうれしくまいりました。この時素早く列をぬけて「皆さま本日はまことに有難う御座いました。路郎師は勿論吾ら不朽洞会員一同衷心から御厚礼申上げます。有難う御座います」と結びました。数段数列はくだけて各自の顔になり三々伍々と帰路につかれる出口のドアのところで生々庵、栗、香林、小松園、文蝶、春葉、私と「有難う御座いました」と御礼を述べる。華かな綴帳はしずかに静かに下りました。アンコールだ。綴帳はまたあがる。また下りる。心の綴帳こそうつくしき柳魂でありました。



路郎選

その方は卒業したと酒のこと貝塚市
 トランプもお花袋へ入れて行き
 片カナの料理がつく新家庭
 退院の写真白衣に取巻かれ
 新藥の箱まゝごとに予約され
 十代に煙たがられる歳となり
 逢いに行く看護婦さんの眞知子巻
 お隣の小唄が頼なボーナスを受け 宇部市
 漬物二タ切れ旅を意識する 上林 粗影
 空想の中に父も母もなし
 だが君蜘蛛の努力も学ぶべし
 皆んな帰つた後の襖風
 行詰つたら空を見よ空を見よ
 フラッシュで端切れあつめて縫う 大阪市
 帰りには買つてあげますママの虚
 女がつき当れば男怒らず
 質はこゝはつきり読めて駅近し
 校正もされず生れたような僕
 春だそれッ記者は動物園へとび 大阪市
 血を賣るにまで着順の列があり 早川 野甫
 看護婦の素顔を朝のポストで見
 死亡一看護婦日誌のきれいな字 同

看護婦の香がついてきたにぎり飯 同
 妾宅の猫もおんなじ物を喰べ 大阪府 石川ひさみ
 未亡人今度は恋へ義理をたて 同
 膝かして白髪と言つて抜かされる 同
 白衣着てからは男に意気がなし 同
 子を連れた二号は嫌とおゝせられ 同
 街角でバイト同志が慰める 鹿児島県 柳風
 夫とは違ふ名前前で女医者 同
 新婚の中は茶漬の味もほめ 同
 内幕はともかく人気まだつき 同
 恋心窓の灯りを見て帰り 同
 まだ何か疑つてゐる女房の眼 大阪府 高田 一夫
 酒癖も恋しや親に似たりとか 同
 力つきたように冬の日海へ落ち 同
 路の臺オヤもう春がこの土手に 同
 保護願出せと巡査もたよりなく 同
 偽装とは悲し女の生きつき 大阪府 神谷凡九郎
 宿命へ抗うてゐるのも若さ 同
 感謝してゐるんだと言えぬのも 同
 如才なさそれが女にもの足らず 同
 幸せは此処につきたり子の育ち 同
 ポインターよ急いで何処へ行く 兵庫県 酒井ひか平
 出前持ち裸のそこへ入つて来 同
 のんきどころか今日の晩菜釣 同
 愛妻家 軍務精勵する如し 同
 気まぐれの今夜は易の本を読み 同
 スケールが違ふあと言ふ飲みつ 吹田市
 扶助料で場末に暮すいゝ音締 同
 同 梶川 蘇堂

川柳時評
 炬燵から命令
 藤本満年

保全経済会という得体の知れぬ
 金融機関が突如休業の貼り紙をす
 ると、同類は相次いでバタ／＼と
 倒れてしまつた。危い／＼といわ
 れながらも、無知の大衆は、高い
 利息に眼がくれて、大切な虎の子
 を投資して、少しも心配していな
 かつたのだから、無知ほどこわい
 ものではないのである。それにし
 て、一揺れで、全部が全部倒れて
 しまふとは、余りに脆い基礎であ
 つたと、今さら肌粟する思いとい
 わねばならない。

一揺れて將棋倒しとなり
 にけり

日本の経済は底が浅いといわれて
 いたが、本当は国民の経済に対す
 る智慧が浅かつたということにな
 るのである。保全経済会とその同
 類たちは、はじめから真面目に金
 融機関としての營業をするつもり
 はなかつた。銀行でもなく、無尽
 でもなく、高利貸でもなく、日本
 の法律では、取締りも保護も出来
 ない、丁度法律の穴をねらつた商
 売だつたのである。

法律の路地を歩いた保全
 会

ということになるのである。した



老課長漸くワルツまで進み	同	深刻な上に同業又出来る	石川県	桑山	とよ
磯節へ末座これからのむつもり	同	榮昌へ隣の鶏が一羽来る	同	同	同
學歷のない淋しさが酒を呼び	同	税金にしばらく後妻に搾られる	同	同	同
惚れた弱み彼女の連れのまで拂い	倉敷市	崖に咲く椿眺めて足を止め	同	同	同
君すけで呼べるは給仕しか居らず	同	編入をして炭焼きも一市民	今治市	長野	文庫
結婚せぬわけは食えないだけの	同	名産も八百屋に在れば只の柿	同	同	同
ひまな奴やたらに炭をつぎたがり	同	新民法隠居どころか邪魔にされ	同	同	同
酔えば出る唄は体に似ずやさし	同	耐乏をせよと云い度いのはこちら	同	同	同
職人を使いこなすに骨が折れ	宮崎市	借りる術知つて女は派手に生き	貝塚市	芝原	洋史
職人に金を持たせば呑み歩き	同	こげためし仲良く詰めて行く職場	同	同	同
どこからかまた職人をやとて来	同	ジャングルの様に橋筋通り抜け	同	同	同
失恋という経験はすでに持ち	同	取られてもどうせ旦那の買う馬券	同	同	同
もうすねる仕草に春のめざめ知る	大和 高田市	末席へちよこんといける口坐り	愛媛県	村上	旭童
借り電話他人の声で打ち合せ	同	いつの日か故郷へ帰る時間表	同	同	同
卒業が浅草海苔と駅に着き	同	宣傳車こゝも女の居る所	同	同	同
吊皮ヘシヤツ覗かせた訪問着	同	家柄に遠く弓矢も飾りもの	山口県	岡本	鳥石
悪銭が身につき板につく名士	大阪市	仲人が若く無闇に目出度がり	同	同	同
料亭の隅で立法生れかけ	同	生活のすきも小金が出来てから	同	同	同
コツ／＼と納めた税や何処へいた	同	いける口やつと年始が一ツすみ	大阪市	清水	望峰
皆汚職国警自警もあらばこそ	同	おせじなどよいから酒でも出しな	同	同	同
番茶うまし貸した借りたも暮し	愛媛県	店主の顔色とは遠きネオンの灯	同	同	同
狸とは馬鹿には取れぬ綿名なり	同	再軍備七ツ鉦を思ひ出し	池田市	太田	木声
轉任の希望映画の見えるところ	同	労基法通りで金子が残るかい	同	同	同
送話機が嘘であらうと咎めそう	同	貧乏と知つたら拘摸も拘るまいに	同	同	同
鶏を蹴散らしながら出勤し	岡山市	十代はチークダンスにたちろがす	玉野市	迫田	美婦適
内職へそつと自分で敷いて寐る	同	あれこれと花のカタログ繰る休み	同	同	同
彼女撮るカメラの前を横切られ	同	舌見せた女医を電車の中で避け	同	同	同
煙草吸うボーゾ薄情そうに見え	同	敬遠は覚悟で父の社に務め	兵庫県	森本	花子

がつて、出資者は銀行の預金者とは性質がちがつて、個人々々が預金を返還してもらふ訴訟を起したりすることが出来ないのだから困つたものである。同類がみな同じ組織ではないが、保全経済会の場合では、匿名組合だから、出資者は権利もあるが、義務もあるという事になり、出資金を返還させるためには、出資者の過半数が調印して、出資者組合でも作らなければ休業した財産を処分することも出来ないという面倒なものである。伊藤斗福とか下村某とかという経営者たちも、さすがに、このまゝでは破滅を招くだけで、早く自分たちを保護する法律を出してもらいたいと思つていたのである。それがため、多額の政党献金をして国会方面へ働きかけていたのである。いままでも政党献金で醜名をさました昭和電工事件などの前例もあるが、保全経済会の政党献金は、わが国献金史に最大の新記録を樹立したものであるといふべきであらう。

保全会献金王の名を残し

これでもし、政党や政治家の罪はいつの間にかもみ消されて、経営者だけが法の裁きを受けるのは不公平極まる世の中ということになるのである。そこで国会の行政監理委員会あたりで、大いに政治家の非をあげきたてようとしてい



金ブラの指輪サロンでうらやまれ	下関市	中村九呂平	押賣りの喋り散らした女下駄	大阪市	木村 十悟
こんど来る祕書は戦争未亡人	同	同	性格が合わぬと夫婦二十年	同	同
目を閉じた女唇づけさす姿勢	同	同	孝行のしおさめと云う輸血をし	岡山県	小林 夢介
長男を産んでもらわにやもう厄や	西宮市	東浜 成子	花嫁も四角になつて酌ぎ廻り	同	同
忘年会巷は霧にぬれてゐる	同	同	身の上がニコヨン仲間だけで知れ	岡山県	赤田 一雨
黒髪へ邪恋のきづな断ちがたし	大阪市	永田都詩子	いそがしい人とパチンコ店で逢い	唐津市	新岡回天子
女優とは名のみ画面を歩くだけ	同	同	モダンとは男のズボンなく姿	同	同
裸でと云う子へ細々気を使い	同	同	合併も町舎移轉でつまづき	岡山県	菅田 直
バラ色の人生と云う酔加減	大阪市	安井 蜂呂	側におるだけで幸福そうに云う	同	同
女易者だからほろ酔手相見せ	同	同	事業など第二安樂したい妻	高知市	岡本 元馬
潔癖は榮養分を捨てゝ食い	大阪市	谷 一平	和やかな夕餉で他に慾がなし	同	同
鏡台を何処へ置こうか新世帯	同	同	おどかしの辞表あつさり受けと	松坂市	萬濃 修
決心のつかぬ値札が風に舞い	京都市	松下京一樓	怒りつばい男で風の街を行く	同	同
こんな子にしては	記事を読み	同	麻雀にモーニング着た客も居り	赤穂市	川西 夫水
あの娘また切れたか里へ戻つとり	岡山県	田淵 正平	貧乏だと婚約前の合言葉	同	同
交際費ちよつと費目を覚えて記	同	同	秒針よそんなに俺を鋭らすな	出雲市	久家代仕男
自分だけしやべるが妻の御相談	鳥取県	太田 香二	浮気さえ出来ぬ男の頼りなさ	同	同
敗けた国護岸工事へ手を集め	同	同	鼻筋を云う男性が憎らしい	出雲市	原 章坊
針一本粗末にしない立志傳	岡山市	梶尾 節子	国会へ飛び火それ消せそれ扇げ	同	同
念戀を縫い込んでゐる嫁の針	同	同	保証人守警の職に就くにさえ	和歌山県	谷口喜久治
横着でないがほしいと洗濯機	大阪市	比佐改メ 安井 久子	谷底を覗く恰好でフレックス	同	同
地位も名も捨てた悲恋へ逮捕状	同	同	禁煙の文字が読めない仁でなく	岡山市	小野花園子
女医なればこそそこまでを打明	滋賀県	土守トシ坊	靴下の穴から親が嫁貰え	同	同
洋裁で身を立てるべく二十八	同	同	夜のしじま破る太鼓のストに似る	大阪市	丹波 太路
東京都汚職のビルも春をうけ	大和田 高田市	岩垣日本村	寒行の僧は千里を行く姿	同	同
心才橋頭ばかりの人通り	同	同	ワニまでも食うた男で胸を病み	岡山県	国正兼比羅
冷え性のくせにナイロンなど穿	岡山県	南部ひでを			
大空の青さがいたい朝帰り	同	同			

疑獄事件

の前にその罪を謝すべきであるが、おそらく、台閣の諸公は、役人の不正で一々内閣が變つていたらキリがないと考えているのである。しかし政府発行の職員録をみると、大臣は明らかに官吏となつてゐる。従つて大臣は役人の大將なのである。国民の血税を不正に使つた部下の大きな汚職には当然責任を負ふべきであらう。ところが、近ごろの政治家は不死身である。歌を忘れたカナリヤの如く、責任という文字は政治の辞書から取りはずしてあるらしい。インフレの阻止にしてもその通り、政策の貧困が今日のインフレを助長したことを棚に上げ、今更國民に耐乏を強うるとは、わしや聞えませぬ伝兵衛さんである。スイスの大臣は電車で通勤し、俸給も小学校の校長先生ぐらい、日本の總理大臣は年六百万円の公邸に、三十人の使用人にかしづかれて豪奢に暮してゐる。スイスの国は小さい

瓶の銀山

大阪市大淀區長柄
西通一丁目四四
山銀硝子株式會社
電話四四七番



思慕悲しテ一歩は切れて波へ落ち
勇退と云う事で身を全うし 神戸市 丸川愁電子
ネオン代合めて飲ますバーの酒 同
形式の試験と知らぬ胸がなり 岡山県 大町 別城
恩給になつたが血圧気にかゝり 同
醜女だが若さに馴染み重ねとり 岡山県 池田 古心
二号フトお吉の果てを思ひ出し 同
頼りない男養う小商い 愛媛県 日野 青柳
中年の夢を断ち切る金の事 同
雑魚もまた楽し責任等なくて 岡山県 永松東岸子
トラツクの通る響で朝となり 同
猫と居て爪つむことを思い立ち 愛媛県 横田 放人
校長と勘勘でのむせちがらさ 同
生佛ではない証 抛酒に出る 大阪市 金井 文秋
内職を見付けたらしくとんと来す 同
接待の仕方も覚え榮轉し 新潟県 高野 不二
共稼ぎ電話他人の様に掛け 同
アトリエを持つていつこう絵^を 岡山県 佐々部満佐志
食糧難島にもあつた今朝の雪 同
笑はれぬ日があり淋し万才師 神戸市 岩田 一夜
見晴らしの良さも移轉の通知書き 同
ペビー靴小春日和に持ち出され 岡山県 大塚美能留
雪景色見つめる旅の眼が疲れ 同
米だなど知つて、巡査をつば向き 石川県 福田 卓風
乗馬服りりしく着たが跨がれず 同
坊ちやんのまねして辞表たつき 倉吉市 奥谷 弘朗
役得の無い身の上と誰も見す 同
兄の行動親の愛とはちぐはぐで 大阪市 正口 辰始

耐乏を笑顔で吉田さんは説き 同
倦怠期みせてはならぬスキをみせ 大阪市 三好 澄泉
愛妻が恐妻になる地位となり 同
首切りの特使特二でやつて来る 米子市 勝田 正郎
倦怠期女房が悪いことにされ 同
はやる店奥さん大阪生れなり 石川県 和田 紫苑
記者團におれは白だと逃げてをり 同
暖冬を客と喜び合うも歳 岡山県 国富 直人
篤農の子が百姓を小馬鹿にし 同
君の名はと尋ねてほしい真知子巻 熊本市 高野 宵草
置こたつ無精な僕にしてしまひ 同
改札が始まり土産思い出し 大阪市 西川 恵風
向つ腹そつと収めた年の功 同
なぐられてからしおらしい嫁と 大阪府 森本黒天子
住み込みの或る日暇に浮ぶ母 同
意気投合次は出資でソツボ向き 大阪府 芝池ヨチ坊
会長になつたと言えは母安じ 同
隆鼻術したのがぐれる因となり 堺市 阪口大三郎
君と呼ぶワイフおんなじ職場に居 堺市 横倉漫多朗
仲人の頭目出度く禿げてゐる 堺市 赤松A.T公
新妻が汽車を見てゐる日暮どき 京都市 小林 亀一
身賣して都会で白い米を喰べ 大阪市 土居 利一
御近所の隠居仲居へ入れあげる 大阪市 伊田無鉄坊
長尻に晴れましたねと窓に立つ 石川県 中木 公生
ゆく／＼はあなた任せの再軍備 貝塚市 伏見 一郎
父さんの思想古いと子に云はれ 岡山県 沖 一糸
七十になつても酒と女好き 大阪市 竹中 花春
懐を当にしあつて串カツ屋 堺市 難波 楼天

が、国民所得の一人平均は日本の二十数倍である。耐乏は国民だけではなく、為政者も率先垂範せねばなるまい。

炬燵から耐乏せよと総理
いい

句集「旅人」と不惑

北川春巢

不惑とは論語から出た言葉で、(子曰、吾、十有五而志於学云云、四十而不惑)年令四十才のことであることは、誰でも知つてゐる。孔子は別に自慢をされたわけではなく、たゞ事実を述べられたわけであらうが、その不惑に私は到達した。聖人でない私には、勿論文字通りの「不惑」ではなく、「不惑であるべき年令」と云う意味である。

鉄道に居られた頃長宗白鬼氏が、数年前であつたが、盛んに「不惑」の句を作られたのをおぼえてゐる。丁度その頃、氏が不惑の年に達せられたのであらう。年不惑世に憚りの多く逢う歳四十笑つてすます事多し募集欄もう四十は募集せず笛吹けばやつぱり踊る四十過ぎ息切れを覚え初老の戀わびし等々であるが、後の方の句で見ると、或はその頃はもう、四十を過ぎておられたのかも知れぬ。私の誕生は四月であるから、私に不惑に達したのは、既に昨年の四月であるわけである。然し平素余りそんなことは気にしていなか

もうけた／＼とパチンコの話なり 堺市 山名 小豆
 子には子の親には親のエロ雑誌和歌山県細野 照坊
 パン食でインテリぶつた口をきく 鳥取市 北村 三步
 差押えなれた手付きで運んでい 吹田市 菊田いさむ
 初雪を確かめる様に踏んで見る和歌山県金子一軒屋
 月賦屋に係給袋値ぶみされ 尼崎市 針重 白雨
 小遣と云はずパチンコ代と云え和歌山県松本 梅里
 卒業の背廣着て見てちよつとてれ 尼崎市 眞野 一風
 大観は黒一色で雪景色 鳥取市 岩田八文銭
 注射にもおびえてゐたに手術台 貝塚市 安永美美子
 卒業は終つたがさて次の門 尼崎市 林 澄子
 卒業に当人よりも母の泣く 尼崎市 山本 貞男
 子沢山だから美味しく妻が喰え 堺市 芝原句浪人
 親に似ぬ子に将来の望み持つ 堺市 荒川 勢園
 大山の雪もふたりにえ解けるらん 兵庫県 吉原 紅月
 女教師が叱れば母の声となり 奈良県 絹下 南天
 薄暗い路地に質屋の三代目 群馬県 荻原 竹郎
 共学は恋愛しろと辞書になし 出雲市 原 独仙
 あの頃が倦怠期かと追憶し 玉野市 星川 陽石
 終電車です車掌起してもくれず 大阪府 岡島 孤舟
 看護婦の一輪白い花が好き 熊本市 鹿本 実信
 噂も立てず女教師老いてゆく和歌山県深田やよい
 癒え初めて料理のコツも習つてみ和歌山県植田てる子
 教壇と別な姿の師と出合い 山口県 加川 成人
 玩具屋の手前で子供を斜に負い 貝塚市 福島 丁坊
 過去の人と思えど手紙よう焼かず 堺市 鈴木 風鈴
 入院日花見列車で発たされる和歌山県西岡 春風
 極道も母の涙にさからえず 倉敷市 水島風の子
 卒業の子を町に出す老夫婦 尼崎市 岸本 丹馬

小遣も無駄に使えぬ妻の汗和歌山県楠本 柳生
 玩具までおゆづりになる三人目 広島県 山田スミ子
 乗り遅れ荷物いよ／＼邪魔になり和歌山県那須虎兒朗
 盆梅を賞めてあいきつあとになり 石川県 石川素百々
 職たのむつもり卒業はのめかし和歌山県苗代迫 郁
 附添の口より聖書とは意外 出雲市 坂本竹ん馬
 暖冬へ冬物値下げ／＼して 大阪府 中谷ハナ子
 老婆は叱言のれんの様に逃げ 大阪府 池戸 桃村
 変り行く貨幣の型が世を刻む 金沢市 滝田 柁風
 定休日聞かれちやまずい電話がき和歌山県那須 榮久
 本当なら嬉しい噂と娘逃げ和歌山県津村 美子
 連休日野暮な男は持て余まし和歌山県北平よし子
 のむ事ももうける事つづきなり 大阪府 横田 方眼
 白布もう佛の顔として包む 貝塚市 小島さぎす
 軽く打つ肩へ脂粉を撒いて逃げ 広島市 御戸 凡平
 正直すぎて嫌われることも言ひ和歌山県久保田青竹
 過ぎ去つた軍靴の音がまたきこえ 西宮市 和久井白涙
 新築が目当て宝くじを買い 奈良県 菱田 満秋
 フラレ弟入り希望も書き添えて 堺市 辻 圭水
 代々の暮しが解る写真帳和歌山県田中無津美
 デパートのところで／＼に來てる春 西宮市 小浜 牧人
 ねかせれば動いてくれる置時計 豊川市 堤 ちる
 見えすいた嘘人間の弱さです 今治市 越智 義夫
 死んだ娘が今ちや一番い／＼娘なり 熊本県 淵川 秀敏
 履歴書へ大きな鯛を一尾添え 石川県 清水 山花
 青春へ何をかなさん髪を撫で 出雲市 平井 芳風
 靴磨く歌があんまり陽氣過ぎ 大阪府 赤松 遠郎
 身の上を問えば落籍してくれま 津山市 檀原伊佐武
 復職したのう／＼と寝正月 大阪府 原田つとむ
 哀れわれ慰問映画も見れぬとは和歌山県小川 迷人

つた所が、年の暗近くなつて、飲まねばならぬ日が毎日のように続くようになると、白鬼氏の「思切れ」の句のように、恋ではないが、頭が痛かつたり、胃がつかえたりしだした。成程これは年令のせい、歳は争えぬな、と思うようになり、不惑が頭にこびりつき始めた。今年の年賀状にも、四十才になつた挨拶を兼ねた積りで飲んで罷るだけ不惑のお正月と書いた。又あなたの家へ年始に飲みに行けぬと云う予防線の意味でもあつた。

もう一つ年令のせいだと思ふのは、何を見ても余りびつくりせぬようになつたことである。「詩人は子供のように、物に驚かねばならぬ」と聞かされたり、「孔子も『夢に周公を見ず』と嘆かれた」と云うことを讀んだりして、「こゝろ感激がなくなつては川柳も作れなくなるのではあるまいか」とさえ思うようになつて、年不惑だん／＼物に驚かずと嘆いて見たりした。

所が年末、路郎先生の句集「旅人」が出版されるに及んで、私の此の嘆きは吹き飛んでしまつた。驚きも驚くし、感激にも感激した。我ながら、あの句集をはじめ見た時の気持はどうであつたか、到底思ひ出すことも出来ない。私は私にもまだ／＼感激性の残つていたのを喜ぶと共に、「だん／＼物に驚かず」の句は、自分で没にしてしまつた。



平宗盛

富士野 鞍馬

平宗盛は、久安三丁卯年

(一一四七) 父清盛三十才の

時に生れたのであるが、傘屋

の子だといふ傳説もある。

清盛は、長子重盛のあとが

女の子であつたので、男の子

を切にほしがつていたところ

ろ、又女の子が生れた。それ

でひどく落胆して、清水の觀

音へ參詣したが、その婦りに

に、五條坂の傘屋に、丁度生

れたばかりの男の子があつた

ので、その子と自分の女の子

とを取替えた。その傘屋の子

が宗盛だといふのである。

このことは、清盛の正妻二

位尼が、壇の浦で入水直前に

告白していることが、源平盛

衰記に書かれてある。

二十年たつと張替えたのが

知れ (拾 八)

と詠まれ、川柳はこの傘屋の

子を多く材料にしている。

傘屋取あげ婆アの口をとめ

(万安 五)

一産婆はこの秘密を知つてい

る

宗盛が実父家名は六郎兵衛

(タル三五)

一傘のロクロとかけて

宗盛とつけてお里が知れる

なり (傍 三)

からかきにしてもむね盛で

はいけず (万安 六)

一傘の柄瀾にかけて

仕合せは宗盛おろく不仕合

せ (タル二〇)

傘屋の娘むね姫と付くところ

ろ (傍 二)

五条坂合羽屋の子は運がな

し (タル十四)

一女の子は傘屋の娘になつた

宗盛が遠江守だつた時、そ

の領地の、天龍川西岸の、池

田の宿の長者熊野(ユヤ)の

娘を愛して、京都へ連れて帰

つて側に置いたが、その母が

病氣というので、朝顔という

女が池田から迎えに来た。そ

の時熊野御前は、宗盛と共に

清水へ花見に行つていたが、

その場で、

いかにせん

都の春も惜しけれど

馴れしあづまの花や散るらん
と歌を作つて、暇をもらつて
帰国した。といふことになつ
ている。

宗盛の遠江守は、平治元年

十二月から翌年一月まで一ケ

月間で、十三才の時であつた

から、この話は一寸考えさせ

られるが、川柳はこれに相当

興をもつて詠んでゐる。

朝顔はしおれて熊野へ文を

出し (タル二〇)

一花見のところへ故里から使

毛氈の上から熊野は旅へ立

ち (万天 五)

下の句で宗盛判をぬいてや

り (万安 六)

一暇をもらつて帰国

宗盛の伸びた鼻毛を熊野が

抜き (タル一六三)

ちとお足りなされぬ方と熊

野はいひ (拾 五)

傘のこと池田でもいつか知

り (タル十五)

一傘屋の子、凡倉にしている

召した熊野宗盛余程あつく

なり (タル九七)

月に七日は休日ゆや御前

(一〇九)

一同音の湯屋をかけた狂句

人參を食へますそうと熊野

なげき (万安 元)

看病の願いは熊野が元祖な

り (万天 四)

一帰国申出

小便という場を熊野は歌を

よみ (タル一〇八)

よい時分ひつばずしたは熊

野御前 (拾 五)

一小便組要に比べられてる

運のよき熊野六波羅を早仕

舞 (タル一〇九)

熊野御前長居すると水を

のみ (〃 十六)

一壇の浦までついて行かなか

つてよかつた

この熊野御前は、海道一の歌

の名人だと、後に梶原景時が

いつてゐる。

治承四年(一一八〇)宗盛

は、源三位頼政の嫡子、伊豆

守仲綱所有の、「木の下」と

いう名馬を、惜しがりのを所

望して、とう／＼取つてしま

つた。そしてあまり惜しんだ

というので、その馬に「仲

綱」と焼印をして、仲綱と呼

んだ。この侮辱をうけた腹立

ちから、頼政、仲綱が、高倉

宮以仁王を奉じて、平氏打倒

を計画したともいわれてい

る。

馬ぐらいやつたがいゝと菖

蒲いひ (タル十九)

一菖蒲は頼政の妾

ていのいゝ馬どろぼうと源

三位 (〃 〃)

仲綱は傘屋のがきにばかに

され (タル十七)

一こゝでも傘屋の件といわれ

ている

平家とは馬のあわない源三

位 (万安 五)

元馬の出入からさと茶師話

し (タル十三)

一茶師で頼政最後の宇治を利

かしている

ところで、頼政の腹臣渡辺

競は、いつわつて宗盛に従

い、宗盛の愛馬「南鐐」をも

らつて、頼政拳兵の拠所三井

寺へ駆けつけ、

「伊豆守殿の木の下がかわ

りに、六波羅の南鐐をこそ取

つて参つて候へ、参らせ候は

む」

と仲綱へ呈した。それで前の

意趣返しに、その「南鐐」に

「昔は南鐐今は平の宗盛」と

焼印して、尾を切つて、夜中

に六波羅の門の中へ追入れ

た。それで宗盛はカン／＼に

怒つて、競を鋸引にするとい

つたが、どうにもならなかつ

た。それも川柳は見逃してい

ない。

仲綱は宿札の有る馬にのり

(拾 五)

傘はりのむすこと馬のつら

へはり (タル十五)

馬のつら傘屋とすでに書く

ところ (〃 十六)

六波羅に焼鉄をした迷ひ馬

(一四一)

等と詠んでいる。

宗盛は、治承五年清盛没後

の、平家一門の頭梁として、

内大臣になつたが、思慮浅

く、平凡兒で、到底天下を握

る器ではなかつた。大勢は衰

運に傾きどうすることもでき

なかつた。壽永二年(一一八

八



省略国語

戸田古方

世の中が忙しくなると言葉が省略することがあります。曰くMSA、OK、KO等々。

「大法輪」という宗教雑誌が「危機に立つ親鸞信仰」という特集号を出したので読んでみました。

親鸞には新しい宗派を起す考えが露ほどもありませんでした。「御同門、御同行」「親鸞は弟子一人も持たず」といい、自らは真理の代行者、真理の創作者ではなく、真理の発見者として、「謹しみて浄土真宗を按ずるに」「念仏浄土これ真宗」「浄土真宗に帰すれども」という風に「浄土真宗」

(三) 二月には内大臣を辞職して、従一位になつたが、その七月に、とうとう木曾義仲が比叡山まで押寄せたので、宗盛は安德帝を奉じ、一門を置いて、京都各所へ火を放つて、西国へ落ちた。そりや木曾が来るとでんぐりかへす也。(タル十八)六波羅は張替傘の破れ口(七〇)

傘はりの子に持ちきれぬ天が下(一四八)傘でみやこをひらく平家方(万安 六)

翌壽永三年二月には、勢を盛りかえして、神戸までやつて来たが、範頼、義経に押され、一の谷、屋島と敗戦して、壽永四年三月、ついに長門の壇の浦で、一門残らず、入水して亡びた。その時、宗

という言葉をつかつていられますが、それは真の宗教という意味の普通名詞にすぎなかつたのです。親鸞の没後、真宗という名の教団が出来て、ことに八代目蓮如は石山本願寺を作り、農民と結び貴族的地位と権力を具え、徳川時代には国教化され、官僚化され、固有名詞「真宗」の名の下に抜くべからざる本願寺教権を確立していつたのです。

親鸞の達した謙譲な宗教的世界はこゝに全く失われ、没落寸前の危機にまで落ち込みつゝあるのです。親鸞が用語を誤つたとは思いませんが、真の教え、真の宗教のつもりで真宗といつたことに無関係ともいふきれません。

川柳雑誌三二一号を読んでいる時、これに似た用語がこつこつ私の耳や眼にひつかうりました。「十二月医服をぬいだ女医と逢い」(倉敷、方文)の医服

盛は長男清宗と共に、海から引きあげられて、生捕になつた。傘はりめけつ若しゆめとく(万安 六)

入水しようよりは傘張の方がよし(タル十二)壇の浦親子は水が達者にて(万明元)傘の波に漂う氣の毒さ(万安 五)

「我胸へ飛び込む様に飛機の着く」(東京、茶々)の飛機「PTA 期間めいて校長が出」(大阪、沐天)のコウチ、よとつとまつたい、方「サンターを信じ切つてる児の肝」(福岡、十三楼)のサンター「農繁をそ知らぬ様に客が来て」(岡山、笑鬼)の農繁

「動いたら死ぬとはキツイ医戒也」(神戸、へとち)の医戒「婦人会戦時の被布を着て出掛け」(石川、卓風)の戦時の被布「絵があつて売れぬ金屏ですと云う」(芦屋、一十十)の金屏

「亡き妻の想いがつのる娘の似顔」(和歌山、柳生)の似顔句そのものを批評しようとしてゐるのではありません。こうした省略された言葉のつかい方がはたして適切であるかどうかを考えてみたいのです。もう少し普通の言葉をつかつて

宗盛はまぐろのやうに扱われ(タル七六)川柳は最後まで傘屋の子にしている。そして五月には、次男義宗(副将)は、八才で京都で斬られ、宗盛、清宗は、義経に護送されて、鎌倉へ行き、頼朝に對面して、又京都へ戻される途中、六月二十一日、近江国篠原で、父子共斬られ

句意が出せないものか、川柳は短いんだから出来るだけ無駄を省いて表現を推敲するのはあたりまえであります。時代によつて多少の変化はあるにしても、生命ある句として永遠に残すためには省略にも自ずから限度があることだろうと思います。普通の表現では平凡だといわれるかもしれないが、川柳はそんな奇を求めているのではありません。こゝに引いた諸例の如きは眼で見ればあるいはわかるかもしれないが、それにしては妙な感じがします。もしたゞ耳だけで聞いた場合、医服は衣服と間違えられそうです。農繁ぐらいはまだしも医戒に至つてはちんぷんかんぷんです。たしかに耳にひつかうります。

こういうことは省略の欠点を補つて余りある時にのみ許されるべきではないかと思うのです。日本語に取入れられた漢語は数

た。時に宗盛三十九才、清宗十七才であつた。宗盛は頼朝と同年であつたが、同じ幼年の生れでも、雲泥の差がある。人間の運命といふものは奇しきものである。盛衰記には、妹の建礼門院とワケアリのやうに書いてあるところを見ると、やはり宗盛は傘屋の子だつたのか。

多く、日々新語が出来てつけ加えられてゆくやうです。川柳の用語は雅語俗語術語漢語等々に自由です。簡にして要を得る意味で大に研究され用いられてよいでしょうが、なるべく耳できいても取違えないものを選ぶべきで、特別の省略を試みようとする時は特に慎重な考慮がのぞましいわけです。

最後に路郎先生のよく知られた、たくみな術語・漢語の二句を引用させていただきます。凡聖一如元旦のこゝろ知る名も知らぬ山の起伏をうられしがり





集路一

女教師

凡田古方選

分婢費もろて女教師やせて出る 綾美
未だ独りですと女教師わるひれや 良坊
華やかな花街を女教師ツンと過ぎ 水煙
女教師に好きな男の子が二人 多久志
女教師の夢はやつぱり結婚よ 同
女教師も生理的な恋があり 一平
教師らしく板につく頃嫁に行き 横寿喜
切り返す様に女教師意見言い 梨花
女教師誓のまんまそのまんま 秋香
女教師も聞き合はに賞めて置き 摩天郎
宴会へ女教師角へ角へ寄り 一雨
女教師も芸者ワルツで菜を刻み 夢介
女教師がちよつとあてたかえるの子 東岸子
臨月の女教師肩で講義する 惠二朗
女教師の今日は和服のお仲人 鮎美
女教師に生理の手当して貰い キヨ
女教師の長い休みは産ごもり 藤浪
深い意味もなく男教師とろまが合い 初甫

恋してる気よりも見えぬ授業ぶり 満秋
産休を言い出せぬまゝ流産し 芳仙
新卒の女教師酒を注ぎこぼし 同
女教師のまゝで小さな共稼ぎ 和友
女教師の小さな受持山の村 同
女教師のあまりにもさびしく 同
女教師が決つた様に遅刻する 風の子
整理案女教師ちよつと不安なり 雄々
爪を噛む癖まで女教師たのめ 牧人
女教師の綱引く腰の強いこと 素面々
女教師は説まないけれど聖書持ち ひか平
女教師のある日ルンパの踊りたく 伊佐武
Y談へ女教師の頬冷たかり 七面山
人権蹂躪へ女教師を辞職して 日満
孫の味知つて女教師まだ止めず 古心
女教師が仲人になるよい夫婦 白峰
ハトボツボ弾いて歌うて嫁遅れ 夜潮
女教師は園児におされ引張られ 素百々
臨月の腹にチョークの粉が降り 卓風
教師より先に女である嫉妬 芳仙
女教師の揉りたい子が二三人 しげお
失恋の女教師分教場に志願する 三步
生理日か今日白黒がよく折れる 同
許される範囲で女教師化粧する トン坊
女教師は醜いままに品をもち 同
女教師でなければならぬ叱り様 梨花
女教師だから青春も梓に入れ 十梧
五・見合して理想堂々語り出し 八文銭

約束

杉谷湖山選

約束へ猪口も一役つとめさせ 十梧
土地を買ふ約束へ焚火する 木声
約束は詭弁であつた事になり 代仕男
約束が守れる男で憐れなり 緑風子
約束に相手も田舎時間で来 雄々
約束が違ふと注文返される 雄声
約束へ言ひ訳をする訳でなし 和友
約束を遅え小さくいる男 雄声
約束へも一度念を押しておき 十九平
約束が決り時計を合しあい 緑風子
約束の靴が子供に大きすぎ 巷雨
約束をしてよと女給気をもたせ 凡平
約束の時間が過ぎた告知板 多久志
先約がありますよと断われ 鉄児
約束を果しに雪の道を行き 惠二朗
約束は泣きの一手で月を越し 素百々
約束の堅い男で用がふえ 牧人

柳縁薺花さん と僕

酒井ひか平

薺花さんと僕は、不思議な柳縁に結ばれて居る。と云うのは、薺花さんが停年退職された後の後任として就職したのが僕なのである。だから薺花さんと、僕は、職場の先代と二代目であり、川柳でも、兄さんと呼ばねばならないし、薺花さんからは弟として面倒を見て頂きたいと思つて居る。そして不思議な事には、どちらも一面識もない先代と二代目であつたのである。

初めて薺花さんと、僕とがお合したのが、職場の句会であつた。新米の僕が顔を出すと、人品骨柄逞しい老人（失礼）が坐つて居られるので、誰方かと隣りに尋ねると。

「うつかりしなさんな、あの人が君の先代の家沢さんだよ」とのこと。

「じゃあ川柳の上手な」

「そうだよ、薺花つて云う号を持つて居られるが。今日はゲストだ。」

うかつな話したが、ほんとうの事である。だが、話して見ると百年の知己を得た如く話が合い、馬が合つた。此れが縁と云うものであろうし、川柳に結ばれるものの幸せであらう。

「やああんたも川柳がお好きで」と薺花さんの顔に微笑がこみ上げて来る。

約東が違ふと手形突きかえし 三歩
約東が知らぬ時計に罪をきせ 十悟
約東の時間を守り馬鹿にされ トン坊
約東のどつちの親もまだ知らず 葉光
約東は約東不渡りは困ります 摩太郎
約東をしたと娘の悪びれず 夢介
前世の約東だったとは淋し 惠二朗
約東の数では足らぬチヨコレート 法泉子
将来を約して二人月にぬれ ひでを
こふなれば約東水に流します とくじ
約東の手紙に不吉な猫のかげ 成子
二人だけの約東へせい風が吹き 黒天子
信用を約手できめる恐しさ 八文銭
約東へ要忙しくミシン踏む 芳風
同情に堪えぬ約東してしまい 美能留
約東をしたあの時は酔うて居た 伊佐武
約東を忘れて子供に毒づかれ 七面山
約東の通りにすれば損がゆき いわを
約東があつたを形見分で知り 自峰
約東へ明日まで待てと断る氣 牧人
隘口が逢う約東を断わらせ 日満
毒舌をふるわぬならと供につれ 光郎
破約する電話へ母の智慧を借り 同
約東へ隣の時計見てこさせ 民徳
約東の千円ごときで悪に染み 茶々
アメリカで勝手な約東して戻り 法泉子
約東を果した空のこらも澄み ひでを
約東は二人の胸に固く秘め トン坊
約東をして後悔の日を送り 梨花

約東が違ふと家主坐りかえ 東岸子
約東のもうこり／＼と断られ とくじ
約東の時間必死にミシン踏む キヨ
約東へたのんまつせとつけくえ 方眠
約東を社命が反古にしてしまい 曉明
約東をマダム笑つてばかり居り 賀峰
約東を漸やく果す京詣り 良坊
約東に嘘と嘘とが手を握り 雄々
約東は過去に触れないこゝで嫁き 直人
不慮の死へ約東ですと根が他人 一策
約東の文字が待つてゐる告知板 征風
将来を約東された婿養子 満年
約東と違ふ顔ぶれまちつて居 梨花
待ちばけを嘲けつて居る大時計 七面山
約東へ女笑つて席を立ち 古心
約東を軽く流して酌をする 巷雨
約東をすつぽ抜かして慾に生き いわを
約東をしてから易を見てもらい 夜潮
潮時を見て約東へ捺さす判 藤波
約東を破つておいてけちをつけ 喜久治
約東を果す覚悟の帯を締め 夢介
お約東どうり冷たい手切金 葉光
約東へ男同志の手を握り 寛虚
約東を守るベタルを強く踏み 紅月
約東へ金のクサビを打つて去に 実信
約東がまだ決らない曲り角 綾美
佳・神様とした約東を胸に秘め 日満
佳・きつとねと女後から追つて来る ひか平

佳・お約東ですとマダムのいゝ笑顔 鮎美
佳・酒の上ならぬ約東してしまい キヨ
佳・約東をアハ、と破つたり 茶々
佳・約東が重荷になつて寝つかれず 十九平
佳・約東の人に落さない見合をし 一雨
佳・約東の時間へ母の眼をおそれ 鳥石
佳・約東は約東だくとづぶとく出 良坊
人・公約を忘れ左に右に行き 法泉子
地・碧い眼の子と約東をしてしまい 鮎美
天・約東を果して来いと飲んで待ち 光郎
軸・迂闊にも身動きならぬ約東し

★課題吟は作句の練習であるから、古
豪も新進もつとめて出句されたい。
同じ題で同じネライで、どんな表現
技巧が成功するかといふことを自分の
句と比較して見れば大いに益するであ
らう。(A)

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
大阪市東区豊後町四八
立川商事株式會社

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ

「私も川柳がたつた一つの趣味ですが、勉強しましょう、私の後の貴方がそれにしても川柳が好きとは父子相伝の宿縁。皆んなが一人でやる処を、二人して頑張りましょう」と心から喜んで下さり、此の縁に何か奇しきものを感じて下さつたらしい。

芽花さんは、人も知る努力の川柳人である。現在は一介の百姓として土に親しんで居られるが、作句への情熱は、年令を超越し正に川柳の鬼である。そして反面、人として心から親切な先輩である。此うした人と職場二代の縁にながら僕は、幸福でもあるが又、努力して先代の職責と芸術に對して恥じない様にしなければならぬ。

僕は大阪で奉公時代、種瓜平さんや北みきを、竹中アキラ君などと、漫画家を夢見たりして居たものである。その頃から曲なり川柳を愛して居たのが今役に立つて来た。年々から云えば不見転だが十数年を経た僕ははからずも此うして一筋の、正しい川柳の道を見付け得た事は嬉しい。

此れからは真直ぐに一から出発。バク進するのみである。僕のそばには何時も父でもあり兄でもある柳縁芽花さんが居られるのだから。

(なお、篠山支部は、小西無鬼氏を中心として、家沢芽花、田代尋四、小島無聖の諸氏の尽力に依り、再び昔日以上の発展が予想され、現在のモットー川柳第三の町建設に躍動して居る事を付記して置く。)

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社二月句会 (大阪府)

二月十三日 午後六時

於 光 明 寺

早春の寒さに拘らず、火鉢を囲んでの寺院の句筈はまた乙なものである。新顔も益々ふえるのは心強さを覚える。いつも乍ら多数の出席者であつた。開会に続いて、川柳不朽洞会理事長中島生々庵氏は悲痛なる面に、本社並びに不朽洞会の為めに、多大の尽力をした不朽洞会副理事長長村松夢裡氏の計を伝えられその功を讃えられたので来会者は、在りし日の故人を追憶し、感慨深き黙禱を捧げた。古方氏の句評は飛機、医服等の省畧文字について、意見を發表し、路郎師の柳話、前書のある句、時事批判吟等について述べられた。席題、兼題の披露後、不朽洞賞優賞カップは土井文蝶氏の握る所となつた。閉会九時。(摩)

出席者 路郎・黙平・凡九郎・雄声・翠露・南風郎・武助・柳笑・しげお・圭三
紫香・勇・水客・賀峰・一朗・葉乙女・一三夫・淡舟・正斗・鎗杖・十悟・一瓢生々庵・嘉一・梨花・静馬・太路・摩天郎・与呂志・ひろし・沐天・木声・秋窓春巢・多久志・三司・乃文夫・文蝶・文

夫・丁路・香林・玲人・万葉・省三・博也・いわを・古方・蜂呂・葉・小松園・潮花・霞乃・梨里

兼題「値下げ」 麻生路郎選

二三品だけの値下げとは淋し 紫香
手内職一方向的に値下げされ 春巢
値下げ品元の値札もでんと付き 乃文夫
値下げでもワテラやつたり買えまへん 凡九郎
値下げした品へ邪慳にはつき掛け 一三夫
未だ下ると客は振り向かず 玲人
値下げしたものは俺にも要らぬもの 多久志
そろばんにゃんこ合して値下げする 一三夫
買入れた後の値下げに勘を立て 武助
値下げした風呂屋小亭を洗うよう 与呂志
値下げした割にお客の寄りつかず 同
商魂は値下げに大の字をつけて 春巢
税務署へ桶つく様にする値下げ 南風郎
値下げ記事もう期待せぬ小市民 文夫
二等品値下げの文字に引つかり 十悟
値下げした日から客筋変つて来 小松園
値下げしたか知らんが味が落ちて 同
道一つ隔てゝ値下げ 競うなり 丁路
値下げしていてもつたり値切られる 省三
値下げではなかつた別に造つた 葉光
値下げ断行他所がやから書かず 日満
儲けるだけ儲け値下げで又儲け 生々庵
値下げから享忙しい飯を食い 文蝶

兼題「マスク」 北川春巢選

退院のきれいなマスクの眼が笑い 与呂志
バックミラーマスク無気味に写るなり 紫香
新しいマスクで医者の前に立ち 与呂志
真ッ白なマスク神経質らしい 鎗杖

値切るのに態々マスク要る男 秋窓
情熱に女はマスクはづし掛け 柳笑
マスクまではづして弁解して帰る しげお
満員の中で新聞見るマスク 紫香
マスクして鼻の低い娘すますなり 勇

取引きがきまりパン／＼取るマスク 一瓢
写真班マスクの顔が気に入らず 文蝶
寄席の隅マスクの一人暖かい 三司
マスクして欲しい床屋のよくしゃべり 多久志
マスク外してからPTAの喋ること 一瓢
陽溜りでマスク同志が話し合い 淡舟
新患のどこへ行くにもマスクをし 三司
立ち話どころもマスク願へかけ 丁路
恋人のマスク気になる暗い道 季賛
病身はマスクと共に冬を越し 雅楽太
外出へマスク鏡の前に立ち 葉乙女
芸人のマスク見付けた戒橋 南風郎
マスクしたまゝの相談が知れ 水客
ろうたけていっせマスクがよく似合い 葉
埋没の手術にマスク仰山な 多久志
マスクして扱て仰山御外出 へとち
手術助手の眼がかわいているマスク 古方
マスクして来て飲む方は遠慮せ 日満
マスク同志愛の言葉が聞き取れず いわを
見送りの一番前にマスクで居 水客
真ッ白いマスクがいつと弱く見せ 香林
マスクして母と見に来る紙芝居 乃文夫
逢いに行くマスクへ丁度よい寒さ 文蝶
風邪マスク子にさせ犬の散歩に出 春巢

兼題「住込み」 黒川紫香選

住込みが通いに小金貸してやり へとち
住込みのどこか抜けない国訛り 玲人
住込んで二日目にも盗つて逃げ 多久志

階段の下に住込みあてがわれ 賀峰
奥さんの眼に住込みのきれ好き 柳笑
住込みの今日はおかつを別に買い しげお
甦生の一歩住込みからはじめ 塗杖
叱言をばみんな住込み引受けて 雅楽太

住込みが居つて季節の花が咲き 木声
住込みの頃からすでに売けて居り 日満
住込みで猫が一番よくなつき 正斗
住込みへひよつこ故郷の餅とく 水客
住込みのどこの水にも合う育ち 文蝶
住込みの訛りを真似て良い主人 乃文夫
住込みの一人は浪花節がすき いわを
住込みの茶漬で流すくせがつき 春巢
住込みの日課たにも飯をやり 雄声
住込みの暖水道が止らない 水客
住込みへ来た小包は取りまかれ 南風郎
住込みの当座は手紙ばかり書き 圭三
住込みがとぎれ／＼聞くラジオ 紫香

席題「サンルーム」 武部香林選

サンルーム雲の早さを病んで居り 蜂呂
サンルームあはらの骨を讀んで 南風郎
サンルーム母の手紙の有がたし 雄声
サンルームのような電車にうごく 静馬
サンルーム背中のぬくりに年を知る 翠露
サンルーム鯉のぼる音を聞き 太路
サンルーム松の手入れが見つづ 同
サンルーム二月の風に梅が散り 水客
サンルームバナ、の実る国偲ぶ 黙平
闘病へ小鳥見つめたサンルーム 生々庵
サンルームよの子供は丈夫そう 多久志
こゝで芽生えた恋だったサンルーム 古方
情熱も恋もすべなしサンルーム 省三

新緑

宿命とあきめ切つたサンルーム
サンルーム理想に遠い日々もし
サンルーム黙つて坐る顔になり
サンルーム猫にもあつた運不運
血沈の数も聞き合うサンルーム
サンルーム話のはずむほど治り
香林

席題「ボス」

西尾

葉選

きり出しはボス町驛な口調で来
孫だけは勝てずにボスの肩車
ボスの葬式シキビが一丁並び
口軽い男とボスも知つて居る
ボスの手が消えて明るマーマケツト
推薦のビラへもボスは名を運ね
未亡人ボスが頻りに恩を売り
有力者と言う名バツヂを二つ
改心のボス十年の髭を剃り
ボスのある日二号に平手で擲られ
御自分はボスのつもりがおかしうて
ボス稼業眼だけで話つけてゆく
ボス今日は葬儀委員という哀章
ボス案外家では子煩悩
奥さんもやつぱりボスのPTA
眼鏡かけかえてうるさいボスこなり
国警だ自警だボスの踊ること
フツシユへ保釈信じたボスの笑み
ボスの名がトツツ密附帳廻される
もうボスになれたマダムの美麗な手
ソファアへボスと言ふ名の坐りよう
紫香
淡舟
同
文夫
嘉一
摩太郎
黙平
蜂呂
多久志
しげお
生々庵
翠露
万葉
南風郎
しげお
春葉
沐天
秋窓
万葉
三司
栗

席題「スランプ」

新川博也選

スランプへ昔世話した人と会い
スランプへ母の魂が鞭を打ち
スランプの飯だけうんこ食べるなり
スランプへ減るへきりや腕み直し
スランプの大事な日誌書き落し
スランプから妙な信心し初める
御見舞に来てスランプを励まされ
スランプを口実にして酒が過ぎ
スランプへ友酒瓶を下げて来る
スランプの恋愛金が惜しくなり
スランプの肩を叩いてすれ違い
スランプの話自分の例を引き
スランプは万年筆を替えて見る
スランプを股ぐらの兄にさへられ
スパイクの泥スランプによくたまり
スランプを梅の香りに落ちつかせ
スランプにあたる非力知りながら
しげお
玲人
しげお
南風郎
黙平
古方
万葉
水客
凡九郎
文夫
水客
同
春葉
香林
紫香
香林
博也

川
堀支部句会（堺市）

一月二十二日 於 摩太郎居

八木摩太郎報

飲み過ぎが固い握手を續けてい
飲み過ぎを残して帰える終列車
終電に飲過ぎらしい揺られよう
台所へ飲過ぎ同志逃げて飲み
飲み過ぎを運んで行ったパトロール
飲過ぎの功德女給の肩もかり
飲過ぎもかまつて呉れぬ倦怠期
爪弾きの遂には声をたてて泣き
落着きされて爪弾きは久し振る
爪弾きへ旦那は今日も京泊り
爪弾きのこつ竜神に住み馴れて
爪弾きが悲恋のリズムともみえ
嘯きの二人を離すべルの音
貴山
玲人
しげお
南風郎
黙平
古方
万葉
水客
凡九郎
文夫
水客
同
春葉
香林
紫香
香林
博也

川
日立櫻島支部句会（大阪市）

二月四日 於 日立櫻島造船所

丸尾潮花報

祝盃へ耐とはひどい十二月清潮
祝盃へもう二次会の話が出
これしきの酒で祝盃けちくさい
祝盃を惜しんでくれる祝いの酒
祝盃は金一封に足が出る
八百万の神へ一勺ほど捧げ
酒癖を案じられてる祝いの酒
祝盃へ坐る女房もいける口
誓はつて地でゆく三味はほりだされ
うばれた恋三味線の音が憎くく
かまきりのような手をして三味をひき
酒のむになつてヤトナの三味があい
三味線がはいり盃またかさね
加茂川が暮れた枕へ三味を開き
名取りする氣の三味線がまた基準
嫁の荷の三味線が眼をとらへ
膝すこし崩してすねた三味をひき
酒が出て其れから尻に根をはやし
年賀状だけの便りも懐しく
貴山
摩太郎
淡舟
同
春葉
左久良
南風郎
大当りもう官服を汚ながら 香林

川
淀川支部句会（大阪市）

二月九日 於 香林居

みだれ籠女を羨む眼 野甫
こゝ迄は追手も来まいみだれ籠 若葉
温泉の匂い老妻へ感謝のみだれ籠 香林
晴着きてナフキン涎け掛になり 真一
初恋に敗れし過去もなつかしい 天貧
初恋をうち明けかて今日も暮れ 庚申
たゞ歩き廻り初恋くたびれた 若葉
初恋の娘袂を噛んで去に 竹堂
初恋をはむ経済的理由 若葉
初恋は淡雪のごと消えて行き 礼三
初恋の母を邪魔がるほど想い 香林
なぐり書きまた吞まうか廻して来 いさお
風呂敷の中味は汗の汚れ物 司様
野良仕事汽笛へ急に腹が空き 柳蛙
風呂敷も忘れず持たす実家帰り 蘇人
膏薬が大きく見える母の背中 一歩
念のため風呂敷別に入れて行き 良坊
食卓へ時代がひびいた箸をとり 戊理智
沿線の田植汽笛で正午にする 木陽子
けたままし汽笛ヤツタなと思ひ ほんみ
見送りを一歩しげらす汽笛の音 土筆坊
アルバイト無理が祟つて胸を病み 白馬
耳をふさいで汽笛車の横通り抜け 柳慶
旅先の異変知らずか鴉啼く 一規
山嵐地獄の湯気を地に這はせ 銀町
サイン帳読めぬ書体をだいたが 藤四郎
菜畠の汽笛のどかな春にする 同
留守番に母は風呂敷とかせ居り 真砂
風呂敷は帰りの土産予定して 妻揚子

川
下関支部句会（下関市）

二月十四日 於 下関駅

石川侃流洞報

又同じ魔の踏切りに汽笛なる
なにもかも一風呂敷が俺のもの
あなたには無理と女房の薄笑い
風呂敷の中味クイズで子に呉れる
訣別をかなしいものにする汽笛
同 鶏 同 侃流洞

川雄布
哇支部
ワイロー社句会(ハワイ)

於 柳云亭

古川魔花麗報

純毛のスタイル生きた風を切り 笑 有
風評などアイデンターで後家同志 紀南児
諦めの心を揺する風便り 柳 葉
風向きが悪い女将座を外し 魔花麗
風邪引いたイヤ引かせた新世帯 快夢起
子沢山生きた師走の風を御き 虹 橋
競争車見栄とスリルの風を切り 迷 朗
何処を風吹くかと女口説聞く 芳 雨
嫌な風成金風にボツス風 伯 米
常夏の島にも風邪が大はやり 煙 波
回顧談風化したよな恋に触れ 草 一郎
更けて行く夜の風鈴忙しそ 曉 舟
風の子に育てぬ嫁が氣にくわぬ 彩 民
ムーミーの裾をとらせる南風 拝 山
註 ムーミーは布屋スタイルの婦人服
挨拶は風向きを知るパロメーター 彦 坊

川
鳥取支部句会(鳥取市)

二月七日 於 いすゞ販売店

大西八歩報

将来性なんぞ言はせぬ就職難 ひろし
折箱はお稲荷さんのさゝ機嫌 小 松
だまし取る金に投資さう名つけ 喬 水
詐欺をする頭脳も持たず平社員 遊 星
貸す金は無くたまはれる金は持ち 八 歩

社長さん酒のある間に姿消し 新 雪
梯子酒弁当箱を忘れて来 定 男
人生はどうせ夢なり酔うている 耕 民
君もまた飲ける口だとコップ酒 湖 山
酒止めてまで出世はせぬ気なり 三 歩
失恋の応急所置に飲んだ酒 遊 星
百葉の長効きすぎた欠勤者 日 満
降る雪になす事もなく雪見酒 陽 月
貧乏へ寒さ応へる朝の雪 尙 久
大阪は喜ぶほどの雪で済み 日 満
踏切番踏切だけの雪を掻き 吾 柳
雪だるま大失礼な足をあげ 星 雨
失ひし処女の瞳に雪まぶし 岩 佐

川
篠山支部句会(兵庫県)

一月二十四日 於 春日神社内

小西無鬼報

わが春を迎えた絵馬のいきり様 汲 流
国宝の絵馬首だけがハゲて居る 白猫児
強そうな名前の人が絵馬をあげ ひか平
絵馬堂へベタ／＼貼つたわらじ 薺 花
板前は新酒ですよと念を押し 無 聖
銘の無い新酒に惜しい味があり ひか平
春立てば新酒が帰るおらが村 麦 村
もどりだと飲まれた酒水臭し 尋 四
一兆円の予算を担う新酒出来 無 鬼
肚の底まだ判らない握手する 昌 子
握手してネクタイ迄の背丈と知り ひか平
三次会此処でわかれる握手する 無 鬼
妥協する手もない握手せよさう 一 水
儀礼的握手で羽田明けて暮れ 薺 花
初対面イグ／＼ドアーを開けて入り 無 鬼
初対面趣味が気易うしてくれる 麦 亭

川
備前支部句会(岡山県)

一月十七日 於 吉永町公民館

浜田久米雄報

先生のはくろ大きく写生され 詩 郎
春うらら先生だつて恋をする 八千代
成功の便り先生泣かせた子 柳 風子
反省の涙先生ふいてやり 東岸子
先生がちよと困つた再軍備 正 州
口紅も薄く教師と云う生活 歌流児
先生の声がとがつた交又点 正 効
先生も生きねばならぬ人であり 花 盛
金借りる方は立派な印を押し 清 風
実印と云う貫録で社長押し 半 仙
売り食いに使う実印大事がり 柳 風子
自惚れを母は笑つて聞いてくれ 甘井子
腕白な時代を語る灸の跡 高 正
実印をとらうと押しした離縁状 みや子
ルンペンに貰うだけの札を言い 柳 穂
ルンペンが今日も氣になる煙立て 銀句楽
涙金貰つて今日からルンペンだ 甘井子
ルンペンに異郷の空はみぞれる 久米雄
遺言になる実印の隠し場所 東岸子
すき焼に先づ父ちゃん箸を取り 運平子
すき焼の宵真直に帰つて来 淨 美
熱いかとききつのお灸すて呉れ 銀句楽
実印を押して景氣のよい話 久米雄

川
弓削支部句会(岡山県)

一月三日 於 二葉旅館

福島鉄児報

乗り越して旧師の家を訪りさめ 花 子
乗り越しが終着駅で掃き出され 牛 歩
乗り越した同志でくぐる繩のれん 如 水

阪田謄写版

大阪北区芝田町二五

株式 阪田商会

電話 五三六一 番
五三六一 番

乗り越しは線路伝いに帰つて来 弓削平
春のどか亦乗り越しをしてしま 陽 歌
乗り越さぬ様に車掌へ手を頼み 不老
乗り越しは終点迄と肚を決め 松 平
乗り越しに氣付き揺られぬ氣付き 巷 雨
負けられぬ議論とろ／＼乗り越した 伊佐武
一銭もない乗り越しの定期券 笑 泉
乗り越しに氣付きおしやりハタ止 笑 柳
乗り越してあるこゝ知らぬ迎え傘 笑 泉
乗り越したなき赤い灯く／＼来 百 郎
乗り越しは真中にいる満員車 奇 童
乗り越して居らぬ安堵の眼をつむり 久米女
まあ上れこせ／＼するな松の内 皿 水
松の内だけ故郷の土をふみ 紫 笑
うちの子のものを仕立てる松の内 巷 雨
強情な子が雨だれの軒に立ち 鉄 児
強情がちと折れかけた嫁き遅れ 一 貫
母と言う弱さ娘の意地に負け 巷 雨
時間外ですと窓口をつけなく 百 郎
窓口のとがつた声へとり合い 野 人
窓口もよし社長への第一歩 七面山
コンロではもう間に合はぬ子沢山 桃 々
宴会のコンロ下戸組上戸組 弓削平
杓呑みを子等に見られた宿酔 耕 雪

手洗の杓は凍つたまゝで新春 游子
竹箒和尚へ朝の会釈をし 鉄児
竹箒くもの渠もとまりもとり 風樹
竹箒投げたまゝなりよい電報 皿水
どら猫へ大上段の竹箒 松平
姉ちゃんに雑巾僕は竹箒 悠喜女
牛の背をほめく／＼払う竹箒 皿水
竹箒日本晴の庭に立ち 土器

大聖寺支部句会(石川県)

二月十四日 於 桑山とよ居

野村味平報

ボケツトに漬れた茶菓子へはつきとよ
父さんの帰りだ子等に茶菓子あて いづみ
お子へ茶菓子は足して包まれる 光郎
長生きを写真に残す渡り初め 魯木
無惨にもかかしわ釣るした台所 桃園
野放しにすれば鶏小言聞き 味平
殺生を説いた坊主が鶏をしめ 卓風

漢川 浜寺病院支部句会(大阪府)

二月十八日

膳所新三報

母の針思ふ寝巻が届けられ 文糖
病窓の派手な寝巻になやまされ やせ男
床入りの寝巻姿の薔薇匂ふ 大観
呼び出しの電話寝巻を慌てさせ A.T.公
夫と呼ぶ方の寝巻も持つて嫁き 橋村
寝巻には階級のない湯の煙り 句浪人
あの顔も寝巻の柄もピカッばり 雅方
青雲の夢も寝巻の療養所 桜天
丈足らぬ宿の寝巻に笑ひ合い 勢園
酔つづれ眠る良人に寝巻かけ 歌扇
日曜の社長を問えば未だ寝巻 漫多朗
縫い上げる艶な寝巻は他人のもの とよ子

寝る事が仕事で寝巻が良く痛み 舞子
寝巻にも女同志の見栄があり 小豆
よいぞめの寒さに意見されるよう 青道心
湯どうふに寒さを忘れ傘わすれ 大三郎
逢いに行く寒さをしる真知子巻 同
エチケツト此の寒さよりぬぎ 三平
スケートのスリル万点この寒さ 慶坊
寒中に氷いる身の不倖 楽天
寒い日は断つた酒にも未練が出 涙香
暖冬異変寝巻のまんま爪をつみ 真砂
寒さだけ着こんで母は見舞に来 よし坊
水道が凍つて朝寝あわてだし 貞春
寒むがりの洗濯物はつけたまゝ 金太
麦を踏む足は寒さをけとばして 秀星
口喧嘩寝巻を着てもまだ続け 白蘭
床の中寒さを知らぬ不倖 句浪人
貧しさが寒さに強い子に育て 桜天
寒行も怒得去れば寒くなく 業平
北風に下戸あつ／＼のうどんにし 勢園
連れられて寒う飛び込む河豚料理 漢泉
寒暖計覗いて余計寒くなり 春雪
寒い／＼とおでん屋のコツア酒 辻歌笑
小便も我慢に我慢する寒さ 秀月
大気療法寒くないかと見舞客 喜多八
鳥肌ににんにく喰えと言ふ寒さ 漢泉
夜廻りの拍子木寒さをこだます 丸盆
リユウマチの母が險にくる寒さ 風鈴

漢川 貴生川支部句会(滋賀県)

一月十六日 於 貴生川町夜場

黄瀬美秋報

きゆう／＼な小屋が神馬の気に入らず 美秋
競馬のスリルそれは金がお金へスリル 凡骨
色町に育つて五ツこはせ履き 紅月

足袋十文成人の日の子を祝い 文子
女客宅は／＼と愚痴を言い 木人
アルバムへ腰落付けた女客 春巢
二次会は駅の近くの店で呑み 紅月
二次会で喧嘩のつゞきまた始め 美秋
松の内でも一糸みだれぬ親世流 夢生
松の内鏡にせまい日本髪 斗志
羽織着たまゝの風寝も松の内 美秋
ボケツトに督促葉書持つて死に 木人
待ち合す葉書の時間消えかゝり 観月
アトフミの後を葉書へ二三行 春巢
バトロールばかり屋の月を見る 同
バトロール出番来るまでパチンコ屋 夢生
停電をいふ事にして寝るときめ 美秋
身の上は訊かずにはゆこう靴がきき 魚吉
ピンボケを恐れる様な顔でなし 迷羊

みをつくし川柳会(大阪市)

於 天王寺中学校

戸田古方報

つけ馬は曲りまがつた路地の中 雄声
つけ馬とアベック気取のひり者 広義
つけ馬をまいた自慢のあなはし 梨花
ゴーストツアつけ馬不覚にもまれ 古方
つけ馬がいっしよにのんでた話 同
白無垢へ今日ぢや／＼馬のしほしさ 凡九郎
ぢや／＼馬が帰つたらしい戸のひびき 正斗
ぢや／＼馬も今日はしほり借りはなし 雄声
尻馬に乗つてあの夜の事がばれ 梨花
合組のつもりが社長の指にふれ 雄声
見た様な気がして後をふりかへり 花香
権力ヘガヤ／＼と口を出し 光二
蠅も亦よし権力よせつけず 凡九郎
酒にがし今更還る過去でなし 正斗

南海電鉄川柳会(大阪市)

於 親和寮

友淵貴山報

明日は明日うまい今日河豚 無尽
ふぐ位飲んだ元気が恐がらず 圭水
福引の補助券蓄まらぬままに 圭水
三等賞当つて名前はりだされ 圭水
福引の一等賞でマイク沸き 雄声
福引に望みをかけて買ふ師走 同
景氣よい声が迎える福引場 梅志
借金人並み記者の卵なり 梅志
彼記者の徹高く買われて 同
ゆきずりの蕨終点を見失い 貴山
終点で何とかなるとの智恵 無尽
終着駅この駅長は話せそう 梅志
終点のネオンまたたく午前二時 雄声
終点で悠々と降りるおばあちゃん 圭水
終着駅これから何処へ泊ろうか 路郎
終着駅でアラ／＼土産物忘れ 同

東京そばと灘一とすじ

アベノ橋地下映画食堂街

梅里の店

大萬

★大万川柳(第卅八回)を募る

兼題「花見」路郎先生選

締切・四月十五日 旬歌五句以内

★近畿映画ビル建設工事のため三月

末日迄地下食通街休業、但し大万

川柳は依然として存続致します

で右期間中の御投稿は左記へ

阿倍野区松崎町三丁目一〇

大万川柳会宛

カアイ島訪問の築山快夢起氏夫妻



柳・界・展・望

本社では四月旬会を四月三日午後六時から下寺町二丁目市バス停前光明寺で開催する万障繰合せて出席されたい。夢裡追悼旬会が三月十三日午後六時から光明寺で本社主催の下に開催された。路郎師の「夢裡君を偲ぶ」は涙でもつて故人の徳望を頌へられ、一夕同氏生前中を追想するふさわしき句筈であつた。▼南区医師会文化部、杏林川柳会が三月十六日午後七時半から迷路居で開催された。▼大阪通信病院川柳会は三月二十日午後二時から三階図画室で開催。▼南海電鉄川柳会三月旬会は三月二十九日午後六時から粉浜親和寮に於て開催。いづれも路郎主幹出席。▼大阪市交通局、南海電鉄、阪神電鉄、阪急電鉄連合、交通川柳会を三月廿一日午後一時から、天王寺仮泊舎で開催。▼みをつくし川柳会は三月九日夜六時から天王寺中学校で開催された。▼川柳堺支部三月旬会を堺川柳人グループ共催の下に

三月廿五日午後六時半から、摩太郎居で開催盛会であつた。▼京番二十五周年記念全国川柳大会が四月十一日に京都市永観堂で開催され「新らしい」とは、堀口堯人「南北百話」食満南北川柳は進歩したか「前田雀郎」女性川柳作品について「川上三太郎の諸氏並びに二十五年麻生路郎の講演がある。兼題の選者は孝三郎、竹林、伊知呂、鞍馬、伍健、蘭華、周魚、紋太、水府、紅寿の諸氏。桜には少し遅いかも知れぬが、だらりの帯を見るだけでも京の春はのどかである。柳友の参集を期待したい。▼川雑字部支部結成準備のため三月二十八日夜字部市鉄道宿舎に第一回旬会を開催し種々今後の方針等について打合される由。今後の発展を祈る。▼川雑岡山支部は三月例会を兼ね、国鉄文化部主催春季

川柳大会として三月七日夜山陽旅館に開催。勝山、久世、津山、美作、大原、赤坂、吉永、穂井田、玉島、西大寺、等各地からほとんど集り盛会であつた由、全夜知事盃は、萱野景風氏が獲得された。▼川雑備前支部二月旬会は十三日久米雄居で開催。▼岡山県倉敷市の水島公民館文化部川柳の会并に水島グループは近く川雑倉敷支部に改組発展につき二月十九日水島公民館に於て最後の二月例会を開催、多数来会盛会であつたのこと。▼岡山県会陽川柳会は二月二十日夜玉野市日比舘音院に於て二月旬会を開催。▼広島川柳会は、三月第一例会を三月五日午後六時から広島貿易館に開催。▼川雑弓削支部三月例会を、岡山県弓削町金光教会に開催町長杯争奪句戦が行われた。▼岡山県大原町の飄柳会二月旬会が二月十五日夜地久平居に開催された。▼小林不浪氏追悼旬会が青森県川柳人連盟主催東奥日報後援の下に三月二十一日午前十時から青森市新町の榮作堂で開催。▼大谷五花村著「竹の」光が一月末、福島県西白河郡五箇村仮宿の東北川柳会から刊行された。同氏は東北川柳会主幹で、四十一年の柳歴の人、随筆も交えた句集である。頒価二百円。▼福岡葉留路氏（広島市）は中国新聞の三月六日の夕刊に、郷土が生んだ川柳の偉才「黒本芳泉を偲ぶ」を寄稿された。▼小倉へとも氏（神戸市）は此程病氣軽快に迎われ自宅に静養中と

のこと、全快を祈る。なお同氏から路郎師の句集「旅人」発刊を祝し蜀山人狂歌集一冊本社に寄贈された。▼梶川藤堂氏（吹田市）は二月二日公務の爲め上京、三太郎周魚両氏に面会、後相州湯河原温泉に清遊句作せられたと。▼高橋月南氏（奈良県）から「千円も現送出来る札の巾」の句信があつた。▼堺川柳人グループ幹事長岡田鹿の子氏令閨、照子さんが三月十日死去された。謹悼。翌十一日の告別式に本社から路郎主幹が列

席され川雑堺支部からも供花し哀悼の意を表した。▼魚住満潮氏は大阪市西成区柳通五丁目五スランド英気へ転居された。▼河田五風氏（名古屋市）の歳父が一月九日に永眠された謹悼。（摩）

正誤

前号二頁二段一六行目の句主桑山とは福真人の誤り、同三二頁一段二九行目の句、一筆は一年の誤り、同二七頁二段一六行目の句主、蛙声は雄声の誤り。

小兒科 平尾醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

麻生路郎選評 村川源之助装幀

山陽川柳

定価 二二七頁
二〇〇円
二四円

一一八九人作家集

総句数二二四七句

大多數の作家は新聞柳壇から生れた。本書は山陽新聞柳壇の作家の佳吟集である。選評は本誌の主幹麻生路郎先生である。本書を熟読することによつて初心者と雖新川柳の良き作家の列に入ることが出来るように編纂されている。一読を請う。

岡山市東中山下四〇番地

発行所

山陽圖書 出版
KK

新聞柳壇 投稿へ

取次御注文は

川柳雜誌社

大阪府住吉区南内代四丁目二五

振替口座 大阪 七五〇五〇



「公」私「雜」記

★疑獄や持逃げや、心中や自殺で、世の中がなんだか暗い。桜の花が開らくのを機に、もつと／＼明るい世の中になりたいものである。★前号も大変好評だったので編集部はますます張り切っている。一層の御支援をお願いしたい★戸田古方氏に次号あたりから「川柳第二教室」を担当してもらい、新進作家や初心者向きの講話を載せたいと思つてゐる。作家の実作によつて参考になる話を焼けて見たいとのこと故、初心者も同氏宛に句を寄せていただきたい。(池田市井口堂一六四戸田古方宛)★別稿に、北川春葉博士が執筆されたように句集「旅人」の出版記念会が二月十七日夜に、阪急の特別食堂で催された。はじめは出版祝賀全国川柳大会として企画されていたが、私がおことわりしたので、川柳不朽洞会主催として別稿のような出版記念会となつた訳である。従つて川柳人に弘く御案内を申上げなかつた訳であるから、その点悪しからずおゆるしが願いたい。これで頭初企画の五つの内四つまで所行していただいた訳で私の光栄これにすぎないものはない。あつて御礼を申上げる。残る企画

の一つ、私に書斎を建ててやろうとの儀はおことわりしておいた。私の書斎をつくらんと云うことは私自身でつくりたいと云う夢を、もう少し見させて欲しい。★長野晴浜氏から句集「旅人」の感想をいただいたが本号編集後だつたので次号で発表することにした。諒せられたい。★前号で発表した福田山雨楼氏の本社副主幹の就任は各位の讃辞と支持をうけたので提案者の私も満足している。★福田山雨楼氏の副主幹問題に限らず、御界に貢献出来るような名案があれば、隔意なく御示教が願えたら、微力のかぎりをつくして断行したいと思つてゐる。(路)

不朽洞

会から

▼築山快夢起氏(ホノル)市からの消息によると、旧冬から正月五日にかけて、御夫妻で加味島の愛嬢を訪問、途上四千呎ばかりあるコケ山頂からワイメアキヤノンの壮観をレンズに、飛行機で同島麓、四十年振りに杵取る餅搗に、昔日を偲ばれたとのこと、

「此処ハワイ時代ばなれの杵の音」の句や、機上から「共白髪新婚らしくハシヤイで居」の句を本社へ寄せられた。(柳界展望のカット参照)なお、ハワイに於て、文芸人懇談会が始めて、開催せられたので、川雅布陸支部

ウイロ吟社新年句会も合流、盛會に催されたとの由▼池沢白翁氏(京都市)は二月二十八日豊橋から浜名湖をめぐる、山奥の秋葉神社(火防の神三尺坊権現)に参詣し、「これははや伏せの神の宮が焼け」と句を寄せられた。▼阪田良坊氏(下関市)は一月二十七日日本国有鉄道本庁へ出張せられた▲藤本満年氏(東京都)はよほど病氣もよくなつた由、お喜び申上げる。▼戸倉普天氏(兵庫県)令息仁一郎博士は二月二十日帰朝阪大に御勤務の由、お慶び申上げる。▼若本多志氏(大阪市)は二月十七日の路郎句集出版記念会状況を金沢市の安川久留美氏に報せられ慶びを共に願ひあわれた。▼佐野卜占氏(八代市)は二月廿八日全日出発三月一日から四日迄の皇居勤勞奉仕隊に参加された。▼阪田良坊氏(下関市)は下関鉄道病院長としては三月六、七両日広島市医師会館に於ける鉄道病院を中心とする山陽交通災害医学大会に出席された▼水谷竹莊氏(大阪市)は二月十一日、修善寺温泉に一日、翌日東京の富士野鞍馬氏を訪問され、「氣のむいたとこへ出かける一人旅」の句を寄せられた。▼清水白柳子氏(大阪市)は二月十四日伊勢神宮へ参詣され、伊勢路より「参宮に伊賀路で雪に浄められ」の句を寄せられた。

▼北川春葉博士(大阪市)が肝臓炎のため三月十一日大阪市交通局病院へ入院された。▼小西無鬼氏(兵庫県)から川雅篠山支部句会を二月十四日吹雪の中にも拘らず開催、益々支部の地歩を固め、倍加運動の線に沿ひ、誌友獲得に目下支部全員奔走中との嬉しい消息があつた。▼塩浜一路氏(大阪市)は二月十五日星ヶ丘病院に入院、次第に順調とのこと、一日も早く退院を祈る。▼大倉四案氏(広島県)は二月二十五日付広島警察管区本部警備課へ転動された。▼福田安夢氏(大阪市)は過日二女出生された由お喜び申上げる。▼本会相談役永田里十九氏(永田賢治)は三月二日死去されたので、四日午後一時から布施市長堂二丁目の自宅で告別式、路郎師夫妻を始め、鮎美、紫香、水客、竹莊、愛論、没食子夫人等会葬された。▼菊沢小松園氏(大阪市)の店に三月から電話が開通した天下茶屋⑥六六四番▼木口賀峰氏は大阪市東淀川区北川口町二丁目五八一番地へ転居▼山崎帆加夫氏(大阪市)は家事の都合で五月限り退会される事となつた。(摩)

新会員紹介

二月 若本多志(大阪市)正
香林氏推薦

三月 高橋操子(岸和田市)正
内藤きさ子(岸和田市)正
貴山氏推薦

募 集

課題吟募集

二十才代 (廿句) 土井文雄選
ヒステリー (廿句) 黒川紫香選
古道具 (廿句) 大西 八歩選
社 宅 (廿句) 大森風来子選
(四月二十日締切)

毎号募集

近作柳樽 雜詠廿句 麻生路郎選
川柳塔 雜 詠 麻生路郎選
文章 評論・研究・感想其他
(毎月廿日締切)

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲「近作柳樽」は一般作家の雅吟を募る。
▲「課題吟」は何人でも投句が出来る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雜誌

第九卷 第四号
定價 四〇円
(送料四円)
半ヶ年 二六四円
一ヶ年 五二八円
昭和廿九年三月廿五日印刷
昭和廿九年四月一日発行
大阪府住吉島内西代四丁目二五番地
行印蔵人 麻生幸二郎
大阪府住吉島内西代四丁目二五番地
發行所 川柳雜誌社
電話 市東 六四七五(五〇)

Printed in Japan

THE SENRYU ZASSHI

NO. 323

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

第2回

日本ステートフェア

朝日新聞創刊75周年記念

日本一のあやめ池遊園地で
くりひろげられるスピード
と興味を盛つた世紀の祭典

★特別アトラクション★

松竹歌劇団グランドレビュー「春のおどり」

★明るく楽しい豪華施設★

農業科学館	近代産業ホール
近畿観光館	コニーアイランド
観光空中ロープウェイ	電源開発館
スリラーブリッジ	フェリーボート



会期 3月21日→5月30日

近鉄線 奈良駅 近畿池遊園地